

富士見地区遺跡群

赤城遺跡
長泉寺遺跡

平成3年度県営圃場整備事業富士見地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

群馬県勢多郡富士見村教育委員会

序 文

富士見村は、赤城山の南西麓に位置し、西に榛名山、妙義山を望み、南に西上州の山々、さらには遠く富士山が見えるということが村名の由来になったように、豊かな自然に囲まれた風光明媚な地であります。また、赤城山の南麓から南西麓にかけては、広く遺跡の宝庫として知られており、近年の発掘調査の増加によって、具体的な歴史事象が次第に明らかにされつつ有ります。

農業を主産業とする富士見村でも、農業を巡る環境の変化に伴い、昭和58年度から県営富士見地区の圃場整備事業を行ってまいりました。今回の調査はその9年次事業に伴い行われたものであります。

調査は道水路部分の試掘調査だけというはなはだ不十分なものであります、調査の規模からだけでは語れない多くの成果が得られ、富士見村の歴史に新たな事実を書き加えることができました。

とはいえ、調査によって新たな知見が得られる代償として、多くの遺跡が永遠に失われていくこともまた事実であり、文化財保護行政に携わるものとして、いかに我々の祖先の足跡を保護・保存し、また、後世に伝えていくかという責任の重さを痛感する次第です。

最後に、発掘調査にあたりご助力いただきました群馬県教育委員会文化財保護課、大胡町教育委員会、北橘村教育委員会、並びに協力いただいた関係機関、さらには、現場で調査に携わった作業員の皆様に心より感謝申し上げ序といたします。

平成5年3月

富士見村教育委員会

教育長 鈴木清茂

例　　言

1. 本書は県宮廻場整備事業に伴い事前調査を行った赤城遺跡、長泉寺遺跡の試掘調査報告書である。

2. 遺跡の所在地は以下のとおりである。

赤城遺跡　群馬県勢多郡富士見村大字田島字赤城514-2番地

長泉寺遺跡　〃　〃　〃　〃　長泉寺426番地他

3. 調査は、群馬県教育委員会文化財保護課の指導のもと、富士見村教育委員会が行った。

試掘調査は文化庁サイド（国庫補助金・県費補助金・村費）の費用負担で行った。整理・報告書作成作業は前橋土地改良事務所委託金・国庫補助金・県費補助金・村費で行った。

4. 調査期間は以下のとおりである。

試掘調査 平成3年11月11日～11月22日

整理作業 平成4年5月27日～平成5年3月31日

5. 調査組織は以下のとおりである。

教育長 鈴木清茂 社会教育課長 狩野透

社会教育課 係長 本多幸一 主任 羽鳥政彦（調査担当）

6. 本書の編集・作成は主に羽鳥が行ったが、一部松津かほるが補佐した。図面トレースの一部は技研測量設計㈱に委託した。

7. 試掘調査及び本書の作成にあたり、下記の機関、方々のご指導、ご協力を得た、記して感謝の意を表したい。（敬称略 順不同）

群馬県教育委員会文化財保護課 大胡町教育委員会 北橘村教育委員会

大栗勇一 津金沢吉茂 山下歳信 長谷川福次

8. 試掘調査、整理作業参加者は以下のとおりである。

狩野光江 神尾茂 久保学 佐藤満子 塩沢雪江 関口すみ子 関口照子 関谷清治

高橋充子 中東彰子 奈良牛松 萩原弘子 松津かほる 横沢和代

凡　　例

1. 遺構図方位記号は座標北を表している。

2. 採図縮尺は以下のとおりである。

位置図	1/25000	遺物	縄文完形・半完形土器	1/4
立地図	1/1500		縄文土器拓影	1/3
全体図	1/400		石器（石鏃 1/1、小型磨製石斧 1/2、	
遺構	縦穴住居跡	1/80	打製石斧等 1/3、磨石・磨製石斧 1/4、	
	土坑	1/40	石皿・多孔石・石臼 1/6)	
	溝・ピット	1/80	土師器・須恵器・陶磁器 1/4	

3. 遺構実測図中で礫は点描している。

4. 遺構番号は縄文時代とそれ以外の時代とで区別し、縄文時代の遺構似については頭にJを付けて表記している。また調査区ごとに遺構番号を付したため、さらに番号の前に調査区名（アルファベット）を冠し、遺構番号としている。（例－E区のJ 1号住居跡→E J 1号住居跡）

5. 卷末の遺物写真の縮尺は統一していない。

6. 第2図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図（淡川）に加筆して使用した。

目 次

I 発掘調査の経緯	1	III 長泉寺遺跡の遺構と遺物	13
1. 発掘調査に至る経緯	1	1. 概 要	13
2. 調査の経過	1	2. 縄文時代の遺構と遺物	14
3. 調査地の位置と周辺の遺跡	1	(1) 壺穴住居跡	14
4. 遺跡の立地	2	(2) 土 坑	16
5. 発掘調査の方法	2	(3) 出土土器	18
6. 基本土層	4	(4) 出土石器	31
II 赤城遺跡の遺構と遺物	5	3. 平安時代の遺構と遺物	39
1. 概 要	5	(1) 壺穴住居跡	39
2. 1号遺構	5	(2) ピット群	42
3. 1・2号溝	6	(3) 土 坑	43
4. 出土遺物	7	(4) 溝	44
		IV まとめ	49

図版目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	第23図 A区遺構外出土土器(3)	29
第2図 遺跡の地形と調査区配置図	4	第24図 C区遺構外出土土器(1)	30
第3図 赤城遺跡全体図	5	第25図 C区遺構外出土土器(2)	31
第4図 1号遺構実測図	5	第26図 E区遺構外出土土器	32
第5図 1・2号溝実測図	6	第27図 長泉寺遺跡出土石器(1)	33
第6図 赤城遺跡出土遺物(1)染付	8	第28図 長泉寺遺跡出土石器(2)	34
第7図 赤城遺跡出土遺物(2)陶磁器	9	第29図 長泉寺遺跡出土石器(3)	35
第8図 赤城遺跡出土遺物(3)その他	10	第30図 A 1号住居跡	37
第9図 赤城遺跡出土遺物(4)繩文土器	10	第31図 A 1号住居跡出土遺物	37
第10図 長泉寺遺跡全体図	13	第32図 A 2号住居跡	38
第11図 E J 1号住居跡	14	第33図 A 2号住居跡出土遺物(1)	38
第12図 C J 1号住居跡	15	第34図 A 2号住居跡出土遺物(2)	39
第13図 繩文土坑	17	第35図 C 1・2号住居跡及びC 1号土坑	40
第14図 E J 1号住居跡出土土器(1)	19	第36図 C 1号住居跡出土遺物(1)	40
第15図 E J 1号住居跡出土土器(2)	20	第37図 C 1号住居跡出土遺物(2)	41
第16図 E J 1号住居跡出土土器(3)	21	第38図 C 1号土坑出土遺物	41
第17図 C J 1号住居跡出土土器(1)	23	第39図 ピット群	42
第18図 C J 1号住居跡出土土器(2)	24	第40図 B 1・2号土坑	43
第19図 A J 1号土坑出土土器	25	第41図 B 1・2号土坑出土遺物	43
第20図 A J 2号土坑出土土器	25	第42図 A 1号溝	44
第21図 A区遺構外出土土器(1)	27	第43図 A 1号溝出土遺物	44
第22図 A区遺構外出土土器(2)	28	第44図 C 1・2号溝	45

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	3
第2表 赤城遺跡出土遺物観察表	7
第3表 赤城遺跡出土陶磁器一覧表 - 染付 -	11
第4表 赤城遺跡出土陶磁器一覧表	12
第5表 長泉寺遺跡出土石器計測表	36
第6表 A 1号住居跡出土遺物観察表	46
第7表 A 2号住居跡出土遺物観察表	46
第8表 C 1号住居跡出土遺物観察表	47
第9表 C 1号土坑出土遺物観察表	48
第10表 B 1・2号土坑出土遺物観察表	48
第11表 A 1号溝出土遺物観察表	48

写真図版目次

P L 1	赤城遺跡遺構
P L 2	赤城遺跡出土遺物 (1)
P L 3	赤城遺跡出土遺物 (2)
P L 4	長泉寺遺跡A・C区全景
P L 5	長泉寺遺跡繩文時代
P L 6	長泉寺遺跡平安時代住居跡
P L 7	長泉寺遺跡平安時代土坑、溝
P L 8	長泉寺遺跡繩文時代遺物
P L 9	// //
P L 10	// //
P L 11	// 繩文・平安時代遺物
P L 12	// 平安時代遺物

I 発掘調査の経緯

1. 発掘調査に至る経緯

ここに報告する富士見地区遺跡群赤城遺跡・長泉寺遺跡は、昭和58年度から開始された県営圃場整備の平成3年度事業に伴って発掘調査を行ったものである。

平成3年度の圃場整備事業は大字田島地区で予定されていたが、地権者の同意が得られず工事の実施が危ぶまれていた。このため、対象地域は広大な遺跡地となっていたものの、埋蔵文化財の調査も開始できずにいた。平成3年11月になって、急遽工事の実施が決定されたため、道水路予定地の試掘調査を実施し、遺構、遺物を検出したため、記録保存の措置を講じた。

2. 調査の経過

重機により試掘トレーナーを掘削したところ、遺構・遺物が検出されたため、11月11日から作業員を投入し、遺構の調査を開始した。準備期間がなかったため、富士見村教育委員会だけでは作業員が集められず、大胡町教育委員会と北橋村教育委員会に協力を頼んで、辛うじて調査体制を取ることができた。

調査は赤城遺跡から開始し、多少の前後はあったが順次長泉寺遺跡A→B→C→E区と進んでいった。

赤城遺跡では溝等、長泉寺遺跡A・C区では平安時代と縄文時代の住居跡、溝、土坑等、B区では平安時代の土坑、E区では縄文時代の住居跡と土坑の調査を行った。

11月22日、群馬県教育委員会文化財保護課と他町村の協力によって、短い調査は終わった。

3. 調査地の位置と周辺の遺跡

富士見村は赤城山の南西麓にあり、山頂までを含む狭長な村である。前橋市の北方に位置し、東に大胡町、宮城村、西に北橋村等が接している。標高は南端の約150mから山頂の1828mまでで、標高450m前後の傾斜変換点を境として、北東部の山岳地と南西の裾野部分とに分される。赤城・長泉寺遺跡は富士見村役場のすぐ西側に位置し、周辺は濃密な遺跡地帯である。

県道渋川一大胡線を挟んで、南側には昭和62年に調査を行った由森遺跡があり、その東に白川遺跡、さらにその南に久保田遺跡がある。由森遺跡は平安時代の集落跡（住居跡22軒、掘立柱建物跡約10棟を調査）を主体とする遺跡で、縄文時代前期の住居跡2軒も調査している。白川遺跡は古墳時代～平安時代（古墳時代住居跡20軒、平安時代住居跡13軒、掘立柱建物跡8棟などを調査）を主体とする遺跡で、縄文時代前期と後期の住居跡も各1軒調査している。久保田遺跡は多時期に渡る複合遺跡で、縄文時代前期の住居跡6軒、古墳～平安時代の住居跡16軒、掘立柱建物

跡1棟、中近世の溝跡などを調査している。

富士見村役場も遺跡の中にあり、周辺は古墳時代を中心とする遺物が散布している。この北方にある中央公民館も、新井遺跡の一角に位置し、平成4年に民間開発に伴って、中近世の館跡、縄文時代中期の住居跡、奈良・平安時代の住居跡などを調査している。

未調査であるが、赤城遺跡と台地続きで南西方の引田字高橋は古墳時代、細ヶ沢川を挟んで西方の引田字三反田は縄文・古墳時代、その北方の漆窪字宿原は縄文時代の遺跡包蔵地である。平成2年度に調査を行った日向遺跡は、孤立丘である十二山の東麓に位置し、館跡の一部である溝跡を調査している。また、同年に調査を行った愛宕山遺跡・初室古墳は十二山の西側に位置し、縄文時代前期の住居跡11軒、土坑約150基、古墳1基を検出している。平成元年度に調査を行った陣場・庄司原遺跡群は法華沢川を挟んでさらに南西に位置するが、6遺跡で縄文時代・古墳時代・平安時代の住居跡約200軒、古墳7基、方形周溝墓5基などを調査している。

5. 遺跡の立地

赤城山麓は中小の河川の開折によって狭長な台地が形成されている。さらにこの台地には数多くの旧河川の痕跡が認められ、舌状台地などの微地形が形成されている。

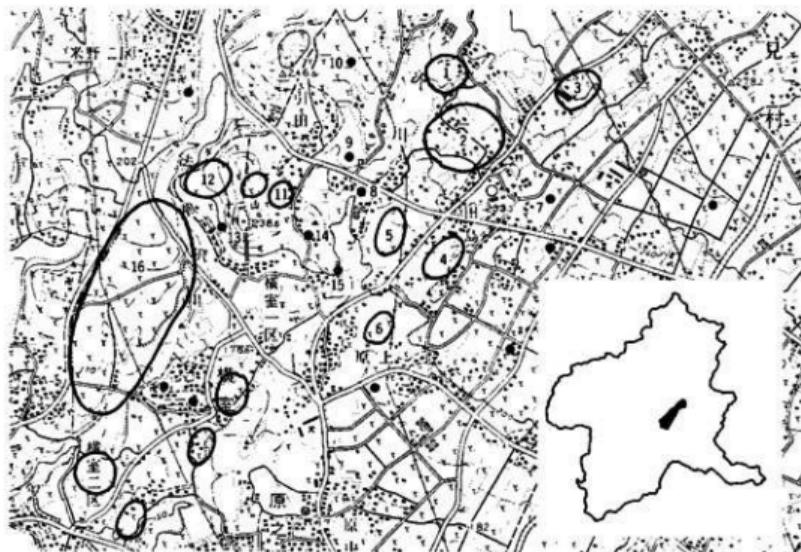
赤城遺跡と長泉寺遺跡は、細ヶ沢川の東側台地上に隣接して位置している。赤城遺跡の南東には細ヶ沢川から樹枝状に伸びる旧河川跡があり、このさらに南東に長泉寺遺跡が位置する。長泉寺遺跡は谷頭を巡って占地しており、ここから旧河川跡が細ヶ沢川に向かって伸びている。長泉寺遺跡の西側は舌状台地であり、東側は旧河川と東側の大川とに挟まれて、白川遺跡などへと台地が続いている。

6. 調査の方法

は場整備事業の道路予定地のほぼ中央に、重機によって幅約1～2mの試掘トレンチを入れた試掘調査によって遺構が検出された部分を拡幅し調査を行った。表土剥ぎはすべて重機によって行い、ローム層上面を遺構検出面とした。

長泉寺遺跡はトレンチごとにA～E区の区名を付し調査を行った。D区からは遺構・遺物が検出されていない。

遺構の調査は基本的に、ほぼ中心軸若しくは竈を通した位置で土層断面の観察を行い、遺物は床面・底面密着の物だけ位置を記録して取り上げた。図面作成は平板実測で行い、遺構平面図・断面図は1/20、全体図は基本的に1/100で行った。炉の実測図は1/10で作成した。調査区域は狭長な道路予定地の試掘トレンチが主であるため、全体を通してのグリッド設定は行わず、各区毎に基準点を設定して国家座標に関連付けた。

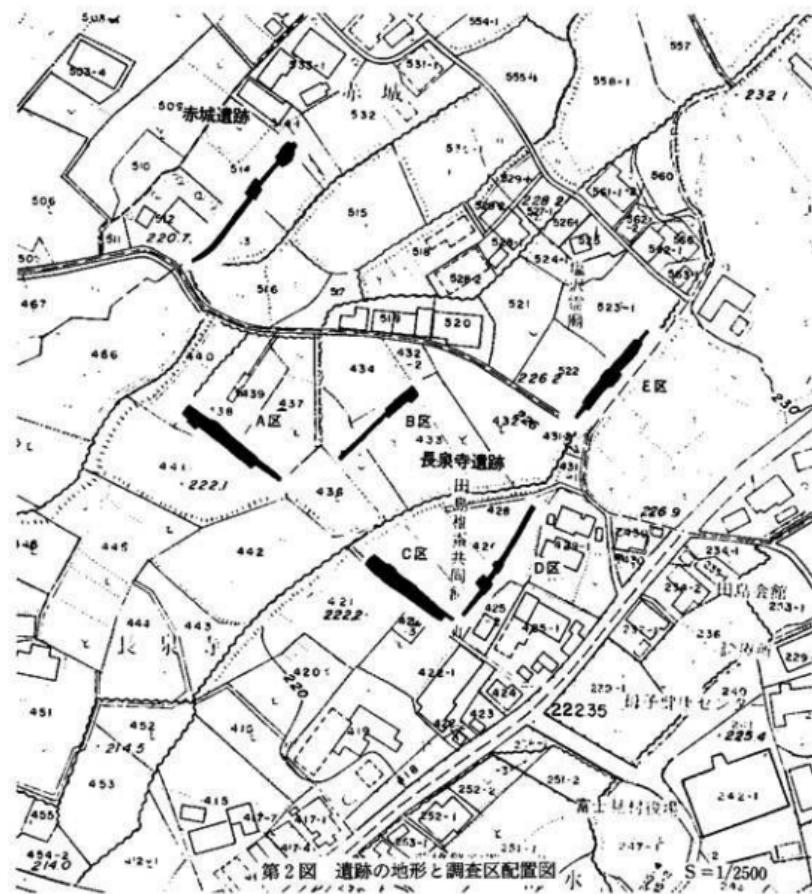


第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	備考	群馬県遺跡台帳No
1	赤城遺跡	田島字赤城	绳文、近世	星散跡	本報告書	2120
2	長泉寺遺跡	田島字長泉寺	绳文、平安	集落	"	
3	新井遺跡	田島字新井	绳文、奈良、平安	集落		2121
4	白川遺跡	田島字白川	绳文、古墳、平安	集落	昭和62年度調査 報告書既刊	
5	由森遺跡	田島字由森	绳文、平安	集落	"	
6	久保田遺跡	原之郷字久保田	绳文、古墳、平安	集落	"	
7	(十二)	田島字十二	绳文	館跡	散布多量	2119
8	(高橋)	引田字高橋	绳文、古墳	包蔵地		
9	(三反田)	引田字三反田	绳文、古墳	包蔵地	繩文中期、十郎一古	
10	(宿院)	塗窪字宿院	绳文	包蔵地	広範囲、散布多量	
11	日向遺跡	引田字日向	中世	館跡	平成2年度調査	
12	愛宕山遺跡	横室字愛宕山	绳文	集落	"	2140
13	初室古墳	横室字初室	古墳	墳墓	" 上毛古墳綜観7号	2130
14	森山古墳	横室字森山	古墳	墳墓	上毛古墳綜観6号	2128
15	道上古墳	横室字道上	古墳	墳墓		2129
16	龍場庄司原遺跡群	横室字龍場・上庄司原・下庄司原	绳文～平安	集落、墳墓	平成元年度調査	2131他

註：群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）及び富士見村誌を基礎に、その後の発掘調査の成果を加味して作成した。
包蔵地の遺跡名は便宜的に小字名をあてた。



7. 基準土層

富士見村の台地の堆積土層は基本的には大きな相違はない。

後世の耕作等によって台地の上面はかなり削平されており、表土直下にローム面が現れることがしばしばである。赤城遺跡と長泉寺遺跡D・E区ではこのような状態であったが、長泉寺遺跡A区東端からB区南半部にかけては旧河川跡の谷頭に当るためか、黒褐色土の堆積が南になるほど厚くなる状況が観察でき、上面にはC輕石（浅間山起源）を含む黒色土の堆積も認められた。また、C区でも堆積状況に多少の差異があるものの黒色土が堆積していた。

II 赤城遺跡の遺構と遺物

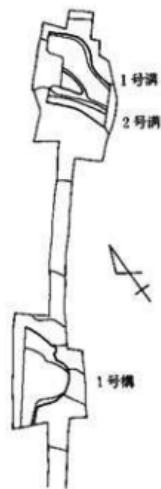
1. 概要

赤城遺跡で検出された遺構は溝2条と性格不明な遺構（1号遺構）1基である。溝は調査区の北端に並んで検出された。1号遺構は調査区の中央に検出されている。遺物は溝中から多量の陶磁器等が出土した以外に、绳文時代前期の遺物が調査区の北端からまとまって出土している。

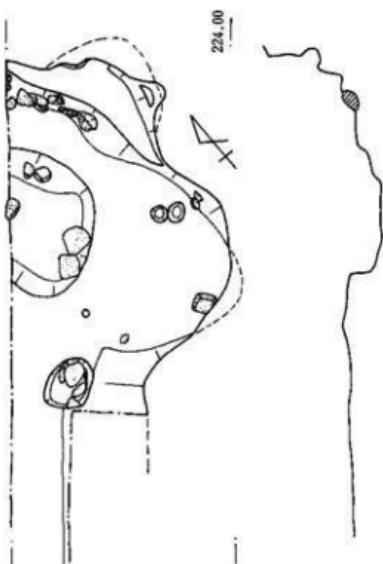
2. 1号遺構（第4図）

試掘トレンチのほぼ中央に検出された。西側は調査区域外であり全体の形状、性格等不明である。

検出部分から判断すると主体部は長円形で、そこから南に向かって溝が伸びているようである。埋土上層の北側から斜めにローム土層が厚く堆積し、上面は踏み固められていることから、人為的に埋め戻した後で、上面を道路若しくは通路として利用していた可能性がある。主体部の底面はほぼ平坦で、中央にはさらに深く土坑が掘られている。土坑壁面には礫が並べられているように見えるが、自然堆積層中に礫が含まれているため、人為的であるかどうかの判断は明確にはできなかつた。主体部底面の周縁や溝部の縁にも礫が並んでいるように見えるが、同様である。主体部の壁面は急角度で立ち上がるが、北側と東側はえぐり込まれている。主体部と溝の底面はわずかな段差で統いており、溝底面は緩傾斜で南に下っている。遺物は陶磁器が数点出土しただけである。性格についての



第3図 赤城遺跡全体図



第4図 1号遺構

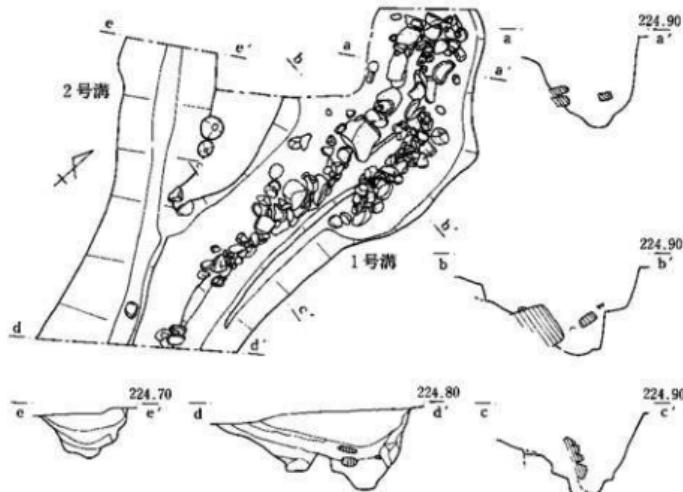
確証はないが、土坑状の掘り込みと溝の組み合せから、溜井の可能性を考えている。

3. 1号溝（第5図）

調査区北端に位置する。東端で2号溝と重複しており、断面観察から本跡が新しい。南北4mほどの長さを調査した。もともと素掘りであった溝に、後になって石積みを施したものと思われる。西側の石積みは東端を除いて、ほぼ全面に検出された。上部は崩落しているが、下部の残存状況は比較的良好。東側の石積みは全体的に残存状況が悪い。南半部は旧溝の壁面がそのまま残存しており、下部だけ幅の狭いテラス状になっていることから、控えを取らないで石積みを行ったとも考えられる。石積み部分の掘り方の内側に30~40cm黒色土を入れ、疊を若干の角度をもって積み上げている。残存する石積みの上段の内法で幅約30cmである。底面は平坦で、幅約20cmを測る。石材は河原石と山石の両者を用いている。大きさは拳大から長さ50cm程度までと様々である。遺物は陶磁器、ガラス瓶、木材、鉄器、砥石等が出土している。遺構の時期は近世～近代と思われる。

4. 2号溝（第5図）

素掘りの溝で幅約1.3m、深さ70cmを測る。壁面は多少の凹凸はあるものの直線的に掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形状を呈する。遺物は陶磁器が数点出土した。



第5図 1・2号溝

5. 出土遺物（第6～9図）

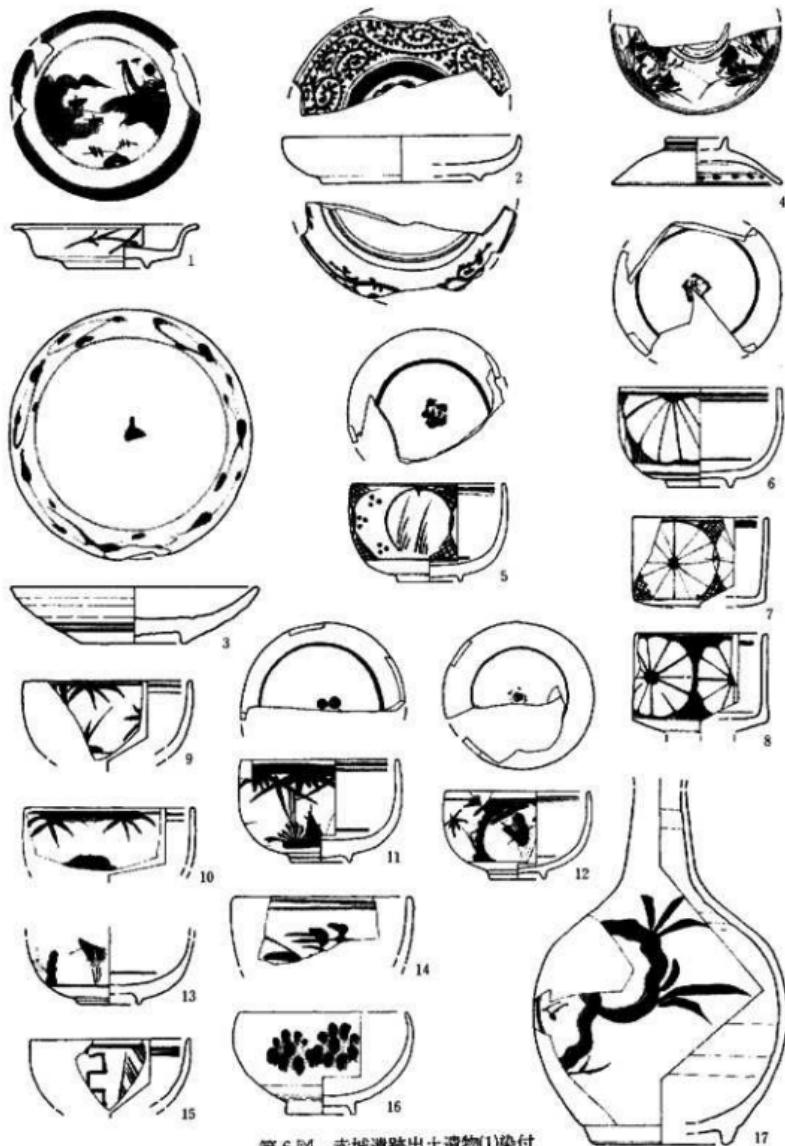
赤城遺跡で出土した遺物は大半が1号溝から出土した陶磁器類である。1号溝からは前記したようにガラス片、木材、鉄器（鎌など）、砥石等も出土しているが、これらについては資料化していない。また、陶磁器類についても写真図版だけしか掲載していないものがある。他の遺構や遺構外から出土した遺物は多くないため、陶磁器類の図版は一括して作成している。図版は陶磁器以外に1号溝出土の石臼と遺構内外から出土した土師器・須恵器、縄文土器について作成している。

縄文土器（第9図） - 縄文土器も大半は1号溝中に流れ込んだ状態で出土している。1は平行沈線で菱形か斜格子に文様構成すると思われる。2と3は爪形文であるが、3は平行（単）沈線だけの部分もある。4は0段多条LR、6・10・22もLRである。8・9は同一個体で他にも多数の破片が出土しているが接合できなかった。原体はRL-LRで羽状に施文する。7は口縁部で原体不明瞭であるが8・9と同一個体と思われる。11・12はRL、13～16はLである。17はLとRで菱形に構成する。18・19・24は単軸絡条体である。20は原体が細く不明瞭であるがRLか。21・22はRL。23はR。25も不明瞭であるがRLか。これらは20・22・25を除き繊維を含む。前期中葉の土器と思われる。20・22・25は前期後半か。26は太い浮線上に半裁竹管で粗く連続刺突する。胎土は砂粒および片岩粒を混入し、にぶい黄橙～橙色を呈する。時期は前期後半の可能性もあるが不明である。

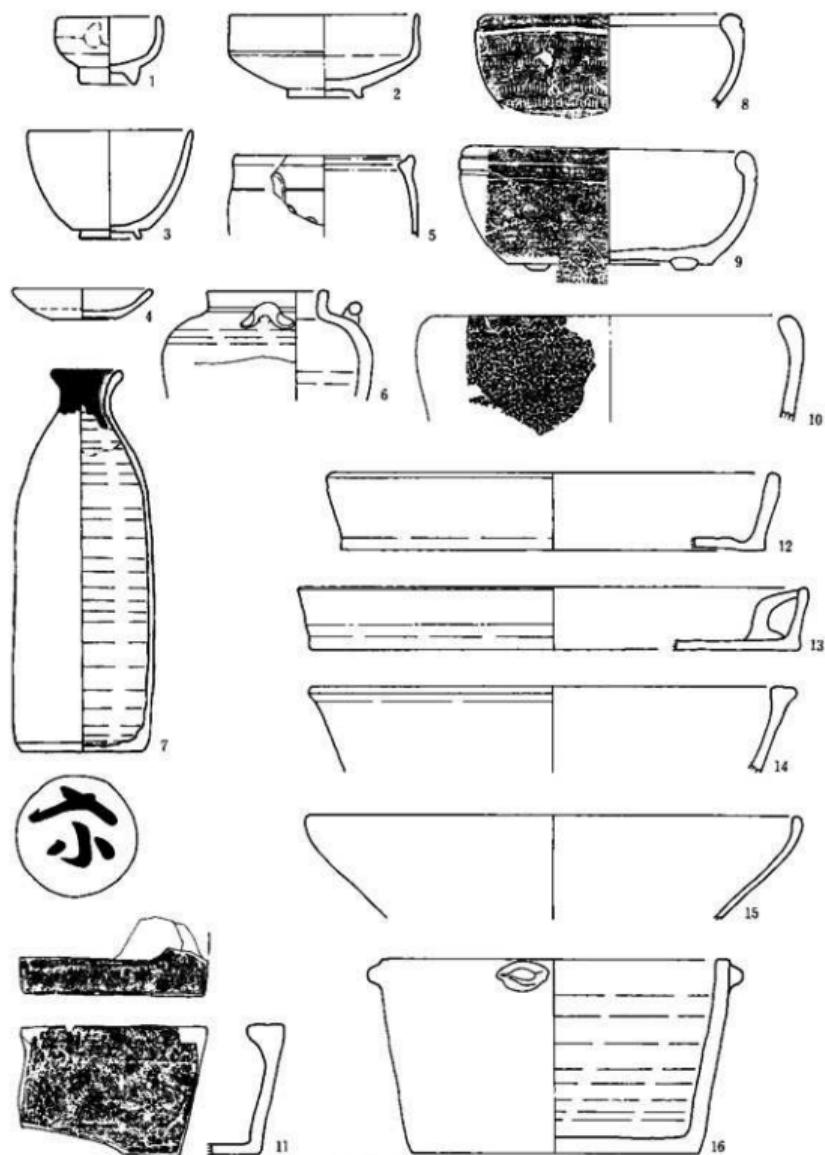
石臼（第8図-1） 上臼で径約37.0cm、高さ12.3cm、重さ21.1kgを計る。安山岩。

第2表 赤城遺跡出土遺物観察表（第8図-須恵器他）

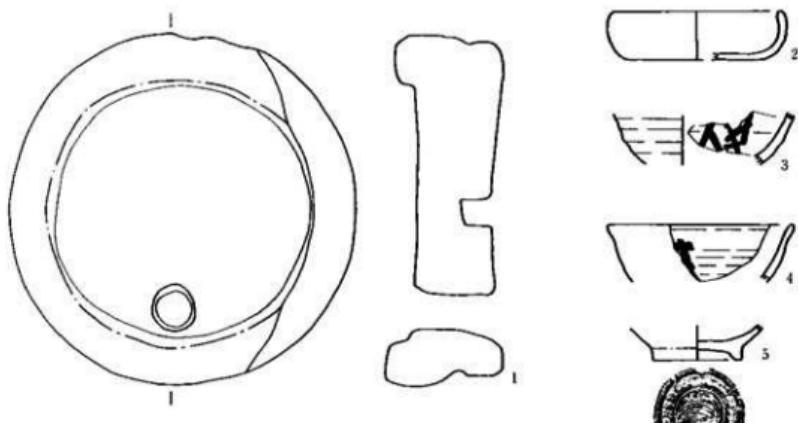
番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・整・成形の特徴	備考
2	かわら け？	1号溝 1/3	口径：12.0 底：9.0 高：3.4	砂粒、黒色粒 にぶい赤褐色	体部～口縁部は内湾して立つ。底部は平底。 底部は回転ヘラケズリ。他は内外面とも回転ナデ 底部の一帯還元。	酸化炎焼成
3	塊 須恵器	1号溝 1/4		白色粗粒 にぶい褐色	回転ナデの棱が明瞭である。 外面に黒斑あり。	墨書き土器 文字不明 「伊か？」
4	塊 須恵器	1号溝 1/6	口径：(13.0)	粗砂、白色粗 粒 灰青褐色	体部丸みがあり、口縁部は外反する。外面の回転 ナデの棱は明瞭である。	墨書き土器 内外にある が文字不明
5	塊 須恵器	1号溝 底部完存	底：6.3	砂粒、白色粒 にぶい黄橙色	高台外面はほぼ直立する。 高台貼付後接合部丁寧なナデ。	



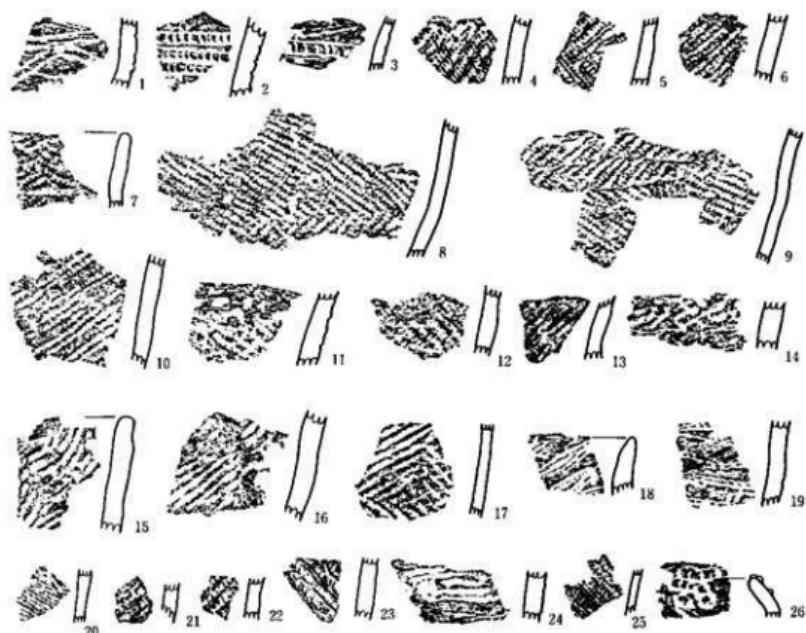
第6図 赤城遺跡出土遺物(1)染付



第7図 赤城遺跡出土遺物(2)陶磁器



第8図 赤城遺跡出土遺物(3)



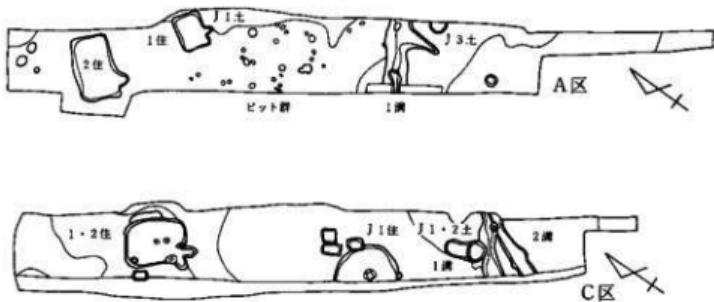
第9図 赤城遺跡出土繩文土器

第3表 赤城遺跡出土陶磁器観察表－染付け－（第6図）

番号	器種	出土遺構 残存状態	量 口 (cm)	胎 土	染 付 文 横	與 須	備 考
1	皿 磁 器	1号溝 一部欠損	口：9.9 台：4.3 高：2.3	白色	山水	くすんだ青色	肥前系
2	皿 磁 器	1号溝 1/3	口：12.8 台：8.6 高：2.4	白色	蕨手唐草(内面) 草花(外面) 菊花	あざやかな青色	肥前系
3	皿 磁 器	1号溝 ほぼ完形	口：13.1 台：5.5 高：2.9	白色	つる草文 見込み染付	淡い青色	蛇の目袖刺ぎ部と高台 端に妙付着。 底部外面部放射状のしづ り。肥前系
4	蓋 磁 器	1号溝 1/2	口：9.0 鉢：3.3 高：2.5	白色	草花 連續円文(内面)團 線	ややくすんだ青色	肥前系
5	碗 磁 器	1号溝 1/2	口：8.1 台：3.4 高：5.2	白色	丸文ちらし	ややくすんだ青色	見込五弁花 肥前系
6	碗 磁 器	1号溝 1/2	口：8.6 底：3.5 高：5.2	白色	菊花	くすんだ青色	見込五弁花 肥前系
7	碗 磁 器	1号溝 1/5	口：7.1	白色	菊花	くすんだ青色	肥前系
8	碗 陶 器	1号溝 1/5	口：7.0	灰色	菊花	くすんだ青色	肥前系
9	碗 磁 器	1号溝 破片	口：8.8	白色	竹葉	くすんだ青色	肥前系
10	碗 磁 器	1号溝 1/3	口：9.0	白色	竹葉	明青灰色	肥前系
11	碗 磁 器	1号溝 1/2	口：8.3	白色	竹葉、筍	くすんだ青色	見込染付 肥前系
12	碗 陶 器	1号溝 4/5	口：7.7 底：3.0 高：4.6	灰白色～ 灰色	竹葉、筍	ややくすんだ青色	見込五弁花 肥前系
13	碗 磁 器	1号溝 1/3	台：3.4	白色	農夫	くすんだ青色	買入 肥前系
14	碗 陶 器	1号溝 1/4	口：9.5	灰色 黒色粒	山水	くすんだ青色	買入 肥前系
15	碗 磁 器	1号溝 破片	口：8.5	白色	矢筈文、折線文	くすんだ青色	肥前系
16	碗 陶 器	1号遺構 完形	口：8.8 台：3.7 高：5.6	灰白色 白堺	花文 (裏面に同様の花 文1点)	明青灰色	買入あり 高台～体下部露胎 瀬戸美濃
17	德 利 磁 器	1号溝 1/2	台：7.4 鉢：13.4	灰白色	草葉	濃い青色	肥前系

第4表 赤城遺跡出土陶磁器観察表（第7図）

番号	器種	出土遺構 残存状態	量目(cm)	胎土色 調	釉調・色調	備考
1	小 陶 器	1号溝 完形	口: 5.3 底: 2.8 高: 3.6	赤色粗粒 白色	体部下半～高台露胎。	貯入あり 瀬戸美濃
2	小 鉢 陶 器	1号遺構 2/3	口: 9.8 底: 4.0 高: 3.3	灰色 灰釉・鉄釉	灰釉と鉄釉を半々に施釉。 灰釉部分に貯入あり。	瀬戸美濃
3	碗 陶 器	1号溝 1/2	口: 8.6 底: 3.1 高: 5.7	白色 透明	細かい貯入あり。 高台部露胎。	瀬戸美濃
4	香 炉 陶 器	1号遺構 2/3	口: 9.6 底: 高:	灰黄色 鉄釉	外面に菊花文。 外面及び内面口縁部に鉄釉。	瀬戸美濃
5	皿 陶 器	1号溝 1/4	口: 9.6 底: 4.4 高: 2.1	灰色 灰釉	輪下に褐色の小斑。体下部露胎。 体下部回転ヘラケズリ。	瀬戸美濃
6	耳 壺 陶 器	1号溝 1/3	口: 6.4 肩: 11.0 高:	灰黄色 鉄釉	外面及び内面口縁部に鉄釉。 貯入あり。施釉は厚い。口唇部は無釉。	瀬戸美濃
7	德 利 陶 器	1号溝 一部欠損	口: 3.8 底: 6.4 高: 19.8 肩: 7.4	にぼい褐色 灰釉 口縁部呉須	底部周縁露胎。	底部墨書き？
8	火 鉢 軟質陶器	1号溝 1/4	口: 17.0	砂粒・赤色粒 黒褐色	口唇部外面直下に沈線。 体部下半にケズリ残す。スタンプを伝統施文。	在地
9	火 鉢 軟質陶器	1号溝 一部欠損	口: 19.0 底: 14.4 高: 8.8	白・赤色粒 黒褐色	口唇部外面直下に沈線が2条入るが、上段は一部途切れ。内面と口縁部外面は回転ナデ。 体部にナデが継続に入る。	在地
10	火 鉢 軟質陶器	1号溝 破片	口: (24.7)	白・赤色粒 黒褐色	内面回転ナデ。 スタンプ施文。	在地
11	火 鉢 軟質陶器	1号溝 破片	高: 9.2	白・赤色粒 灰～黒色	内外面ナデ。	在地
12	鍋 軟質陶器	1号溝 破片	口: (32.0) 底: (29.8) 高: 5.4	砂粒少量 にぼい黄褐色	ちぢれ底	煤付着 在地
13	内耳 鍋 軟質陶器	1号溝 1/8	口: (35.5) 底: (34.5) 高: 4.4	砂粒少量 にぼい褐色 ～黒色	ちぢれ底	煤付着 在地
14	鍋 軟質陶器	1号溝 破片	口: 33.7	赤色粒、小槽 にぼい褐色 ～黒色	回転ナデ。	在地
15	鍋 軟質陶器	1号溝 1/8	口: 34.0	砂粒 灰白～黒色	回転ナデ。	在地
16	火 鉢 軟質陶器	1号溝 1/3	口: 23.0 底: 20.0 高: 13.9	にぼい褐色 ～橙色	内面回転ナデ。外面ナデ。 口縁部外面に突起(把手)。個数は不明。	煤付着 在地



第10図 長泉寺遺跡全体図

III 長泉寺遺跡の遺構と遺物

1. 概 要

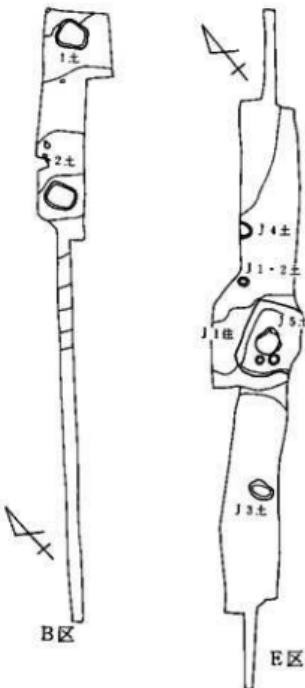
A区—検出された縄文時代の遺構は土坑だけである。遺物は遺構内外から前期・中期のものが主体に出土し、少量であるが後期の物も出土している。平安時代の遺構は竪穴住居跡2軒と溝2条である。このほか時期不明の柱穴群が検出された。

B区—平安時代の土坑が2基と数基の柱穴が検出された。遺物は平安時代のもの以外に縄文時代の遺物が数点出土した。

C区—縄文時代は中期の住居跡1軒、時期不詳の土坑2基が検出された。遺物は前期から後期までの土器と石器が遺構内外から出土している。平安時代の住居跡は2軒と土坑1基である。その他では時期不詳の溝2条が検出された。

D区—遺構、遺物は検出されなかった。

E区—縄文時代前期の住居跡1軒と土坑5基が検出された。本区から出土した遺物は、遺構内外とともに縄文時代前期に限られる。



2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 壴穴住居跡

E J 1号住居跡（第11図）

E区のほぼ中央に位置する。東側と南側は耕作等によってすでに削平されており、形状・規模等不詳である。中央部に土坑が重複し、土坑が新しいと思われる。

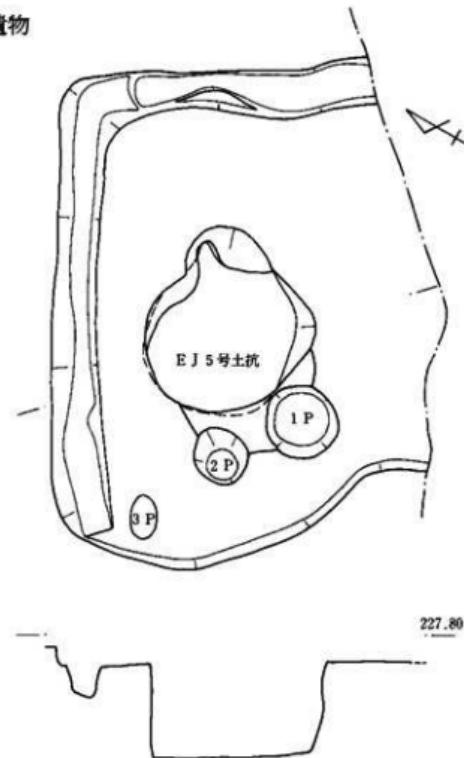
東西約5m、南北約4mの範囲を調査した。検出面から床面までの深さは東壁で20cmを測り、西になるに従って漸減する。壁面は直に立ち上がる。

床面はほぼ平坦であり、比較的よく踏み固められている。北壁と東壁に沿って壁周溝が巡っている。幅40cm、深さ約30cmを測る。南端は調査区域外へ伸びており、西端で途切れるが、西壁は捉えられず、周溝も検出できなかった。

調査部分の南に寄って3本のビットが検出されている。1Pは径約80cm、床面からの深さ約50cmを測り、平面形は円形を呈する。2Pは径約60cm、深さ85cmを測り、不正円形を呈する。3Pは長径50cm×短径30cm、深さ35cmを測り、長円形を呈する。E J 5号土坑の東側張り出し部分と2Pは本跡の主柱穴の可能性がある。1P及び3Pの帰属は不明である。炉は検出されていないが、E J 5号土坑によって壊された可能性がある。

遺物は主に埋土中から多量に出土しているが、土器はほとんど大小の破片であり、形状が復元できたものは少ない。石器の量は多くないが、スクレイパー類、剝片が出土している。尚、後段にE区遺構外として掲載した土器の多くも本跡から出土した可能性が強い。

本跡の帰属時期は、出土土器から縄文時代前期中葉と思われる。



第11図 E J 1号住居跡及びE J 5号土坑

C J 1号住居跡（第12図）

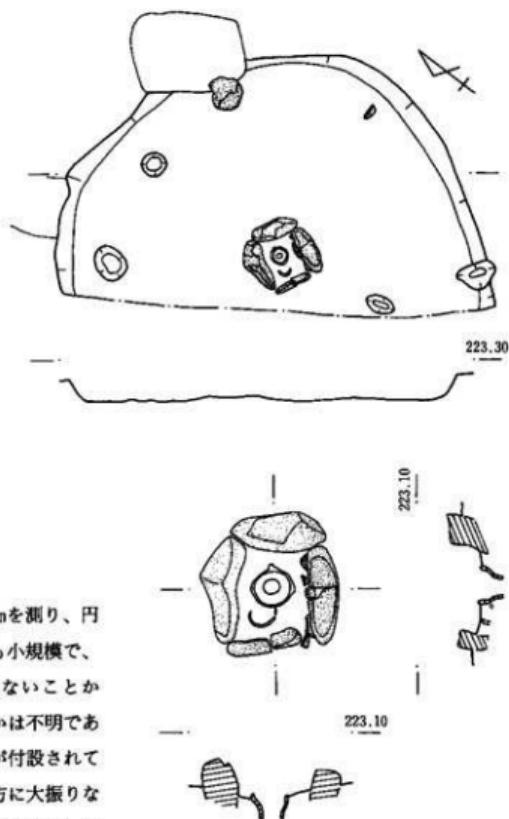
C区の中央部東寄りに位置する。時期不明の土坑によって、北壁を切られ、現代の耕作溝等による搅乱も受けている。南側は調査区域外である。

径約4m、深さ約20cmを測り、円形状を呈すると思われる。壁面は角度をもつて立ち上がる。

床面は平坦であるが、あまり堅緻ではない。西側の壁に沿って2本の小ピットが検出されている。1Pは長径40cm、短径30cm、深さ15cmを測り、長円形を呈する。2Pは径約30cm、深さ10cmを測り、円形を呈する。いずれのピットも小規模で、他の部分にピットが検出されないことが、本跡の柱穴であるかどうかは不明である。住居のほぼ中央に石窯が付設されている。石材は西・北・東の三方に大振りな河原石が用いられており、南側は破損した石皿を転用している。内法は東西約35cm、南北約50cmを測る。中央には小型の深鉢が2個体埋設されているが、検出状況から判断すると中央の方が新しいと思われる。

遺物は埋設土器以外は埋土中から土器破片・剝片類が出土しただけである。

本跡の時期は出土遺物から中期後半と思われる。



第12図 C J 1号住居跡

(2) 土坑（第13図）

A J 1号土坑

A 1号住居跡の東壁に重複する。土器の出土範囲をもって土坑としたが、余り明瞭な掘り込みではない。径約85cmを測り、円形もしくは長円形を呈すると思われる。断面形状は鍋底状で、深さ約25cmである。遺物は実測可能な深鉢と底部、土器破片、数点の剝片が出土している。

A J 2号土坑

遺物が集中して出土した地点に土坑番号を付したが、明瞭な掘り込みは確認できなかった。

A J 3号土坑

A区東半部北側に位置する。北端は調査区域外である。

径約125cmを測る円形の土坑で、深さ約10cmと浅い。遺物は出土していない。

C J 1・2号土坑

C区東半部に位置し、1号溝と重複する。2つの土坑の重複としたが、単一の遺構の可能性もある。

J 1号土坑は東西120cm、南北140cmを測り、深さは17cm程である。形状は整っていない。遺物は蜂の巣石が出土している。J 2号土坑は長径180cm、短径約140cmを測り、長円形を呈する。深さは15cm程で、J 1号土坑との底面の差は明瞭でない。遺物は出土していない。

E J 1・2号土坑

E J 1号住居跡の北側に近接する。2基の土坑の重複としたが、単一の遺構の可能性もある。

J 1号土坑は径約1mを測り、円形を呈する土坑で、深さ18cmを測る。J 2号土坑は径約60cmを測る円形の土坑で、深さ30cmを測る。遺物はいずれからも出土していない。

E J 3号土坑

E区南半部に位置する。長径175cm、短径105cmを測る長円形の土坑である。深さは約30cmである。遺物は出土していない。

E J 4号土坑

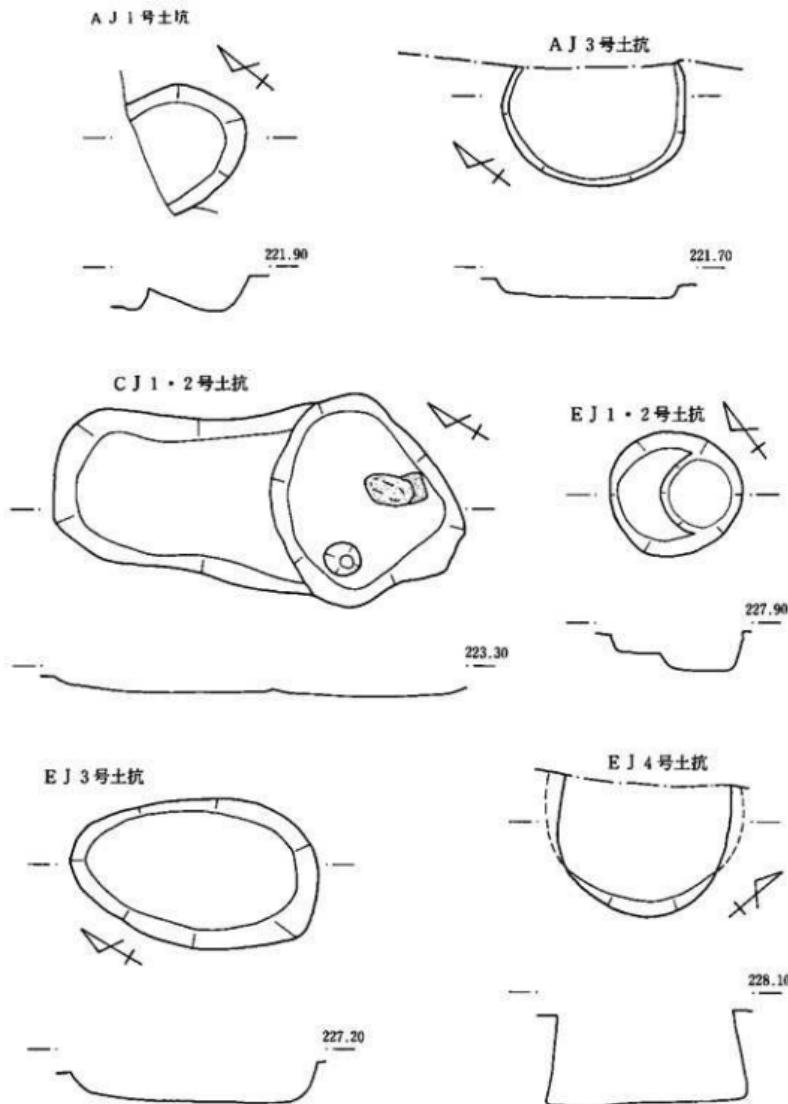
E区北半部に位置する。E J 1・2号土坑と近接する。西半部は調査区域外である。

径約120cm、深さ約65cmを測る円形の土坑で、断面形状は袋状を呈する。遺物は出土していない。

E J 5号土坑

E J 1号住居跡の中央部に重複する。南側にも円形の落ち込みが認められるが、本跡との関係は明確でない。長径240cm、短径200cmを測る不整円形の土坑である。深さは約135cmを測る。北東には径約30cmの柱穴状の部分がある。底面が本跡と連続しており、本跡に付帯するものと考えたが、E J 1号住居跡の2Pと合わせ主柱穴の可能性も否定し切れない。

遺物は数点の土器破片、剝片が出土している。



第13図 繩文土坑

(3) 出土遺物

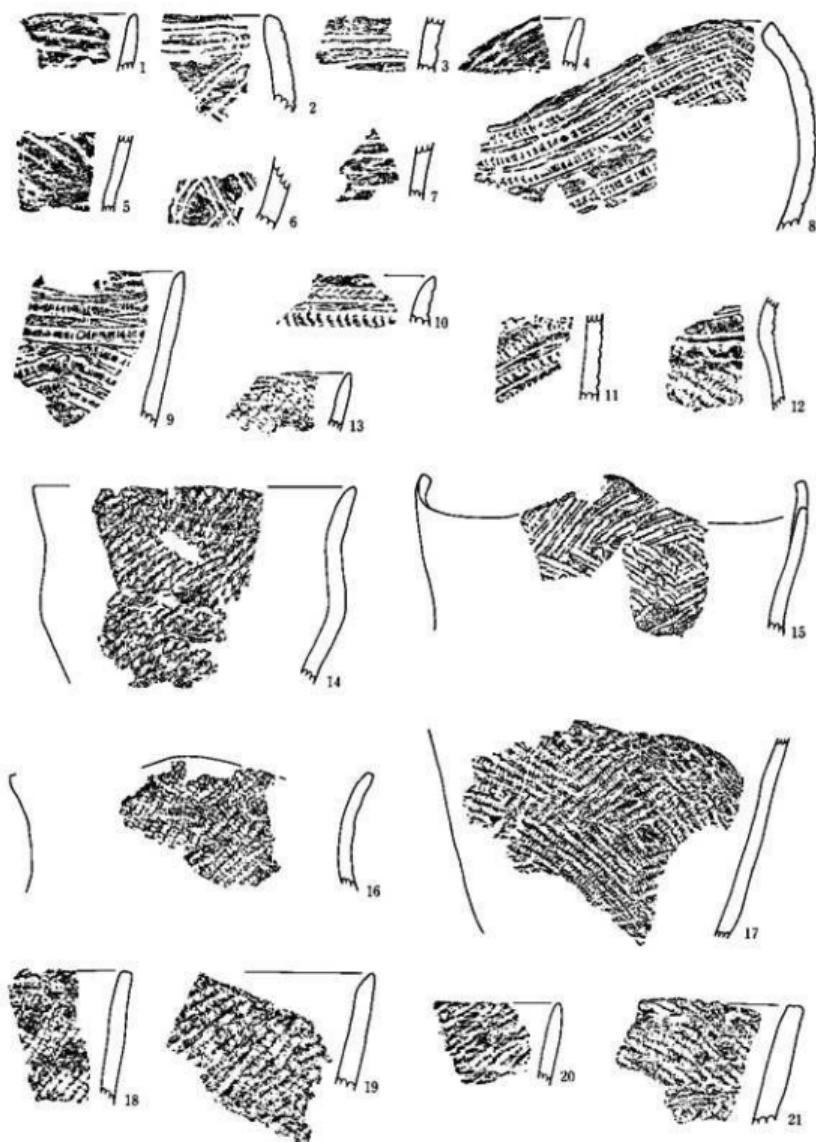
E J 1号住居跡出土遺物（第14～16図）

本跡から出土した土器は全て縞文を含む。

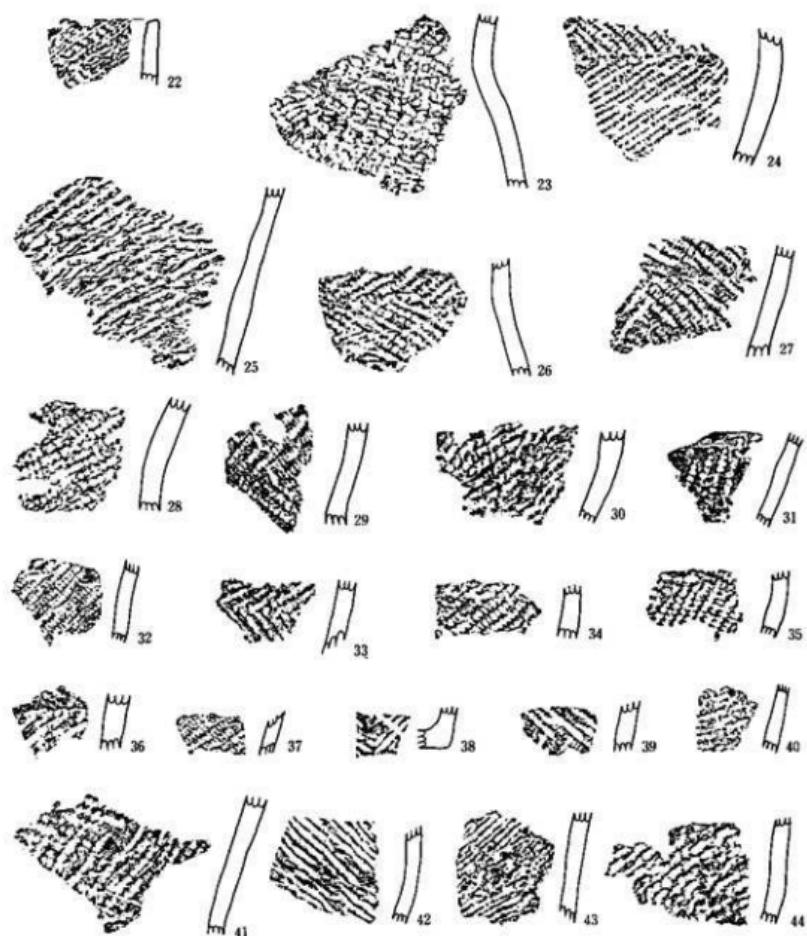
1と5は表面が摩耗しており不鮮明であるが、単軸絡条体と思われる。2～4、6、7は平行の沈線で施文されるが、4は浅く細い。8～11は比較的幅広の爪形文で施文される。12は頸部破片で平行沈線で施文される。地文は0段多条RLである。13以降は全て縞文で施文される。14は平縞の深鉢で原体は前々段反撫か。15はR-太1・細1・太rとL-太2r・細rの異束多条縞文で菱形施文する波状口縁の深鉢である。16は弱い波状を呈する深鉢と思われる。原体はLR。17は胴部破片でLRと0段多条RLで菱形構成する。13、18～22は口縁部で、13は平縞LR、18もLRで平縞、19、20は無節Lで波状口縁、21はRと思われる。22は附加条第2種で平縞と思われる。23は粗い原体でRL-LRか。24もRL-LRであるが、原体の太さを変えているか、若しくはRLと直前段多条LRで羽状に施文している。25は直前段反撫L、26はRL-LR、27は0段多条RL-LR。28・31・32・34・37はLRで、30もLRか。29はRLと0段多条LRで羽状。33は0段多条RL-LR、35は不鮮明であるがRL-LRか。36は結束RL-LR。38はRとLで羽状に施文する底部。39は0段多条RLか。42はR、43は太L2本に細L1本を付加している。40、41、44は原体不明。45と46は同一個体で無節LとRを羽状、菱形に施文する。48・50もRとL、49と52はR、51、58はL、53は粗い原体でRL-LRか。54は単軸絡条体でRをL巻きとLのR巻き、55もLであるが、横と斜め方向に施文する。60はLとRで羽状に施文するが、58と同一個体の可能性がある。61は附加条第2種でLR+2LとRL+2Lを羽状に施文する。62は単軸絡条体でR縞2条をLに卷いたものとL縞2条をRに卷いて羽状に施文。63は附加条か異束異条斜縞文。64は単軸絡条体でL2条とR2条+11条で菱形に構成する。65は附加条第2種と思われるが施文の交差部であり不明瞭である。66は附加条第1種で菱形に構成する。

C J 1号住居跡出土遺物（第17・18図）

1・2は炉内埋設土器である。1は4単位の山形突起を付す深鉢形土器である。口縁部文様帶は5単位の梢円区画文と渦巻き文を沈線と縞帶で構成する。梢円区画文の内部には縞文が充填されるが、1個は無文である。胴部文様帶は縦位の沈線で区画され、縞文帯と磨消帯が交互に配されるが、区画帯数の関係で1ヶ所は縞文帯が連続する。2は4単位の小波状（突起？）口縁深鉢で、1ヶ所は山形突起が付される。突起先端は凹められ、前面には斜めに沈線が付される。口縁部文様帶は梢円区画文と渦巻き文が口縁部に合わせて付される。渦巻き文は右巻きと左巻きがそれぞれ沈線で連結される。胴部文様帶は縞文帯と磨消帯が交互に配される。1・2とも胴部下位～底部は打ち欠かれているが、口縁部は完存する。3～6は口縁部破片である。3・4は波状も

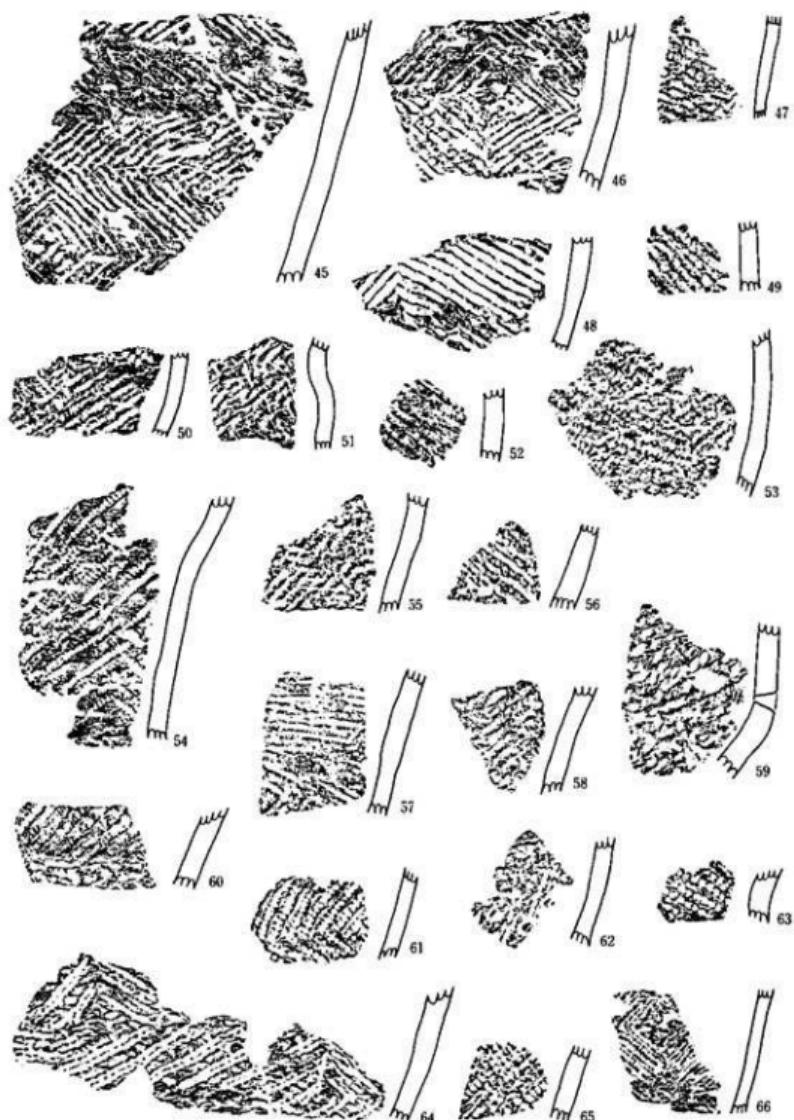


第14図 E J 1号住居跡出土土器(1)



第15図 E J 1号住居跡出土土器(2)

しくは突起を付す口縁部で、3は隆帯、4は隆帯と沈線で区画文を構成すると思われる。5・6は無文で6の下位には微隆帯が認められる。7～9は磨消帯が垂下する胸部破片である。10は条線が垂下する。12は蛇行沈線が垂下する。13は横位の沈線により文様帯を区画する。14は繩文帯と磨消帯が沈線で区画される。15は2本の沈線で繩文帯と磨消帯が区画される。17は地文上に隆



第16図 E J 1号住居跡出土土器(3)

帶とこれに沿う沈線が垂下する。11・16・18～23は地文だけの胸部破片である。

24～32は前期後半に属すると思われる破片である。24～27は地文だけの胸部破片で、いづれもRLである。28は口縁部破片で口唇部直下に幅の狭い爪形文帯が3段に横走し、円形刺突文が縦位に配される。27も口縁部破片で、口唇部直下に連続刺突文と、その下には4本1単位の平行沈線文が施文される。施文具は貝殻と思われる。30以下は胸部破片で、30は3本1単位の平行沈線で鋸齒状に施文される。31・32は爪形文である。

A J 1号土坑

1は波状口縁を呈する深鉢で、底部を欠失する。口縁部文様帯は爪形文で菱形に構成する。胸部はRL-LRで羽状-菱形に施文する。2は口縁部破片で竹管でC字状の連続刺突を行ふ。4もLの地文上に竹管で連続刺突を行っており、2と同一個体の可能性がある。3はRL-LR、5・6はLで、7は附加条第1種で羽状-菱形に施文する。8は底部で、上げ底状を呈する。繩文はRL-LRを施文する。

A J 2号土坑

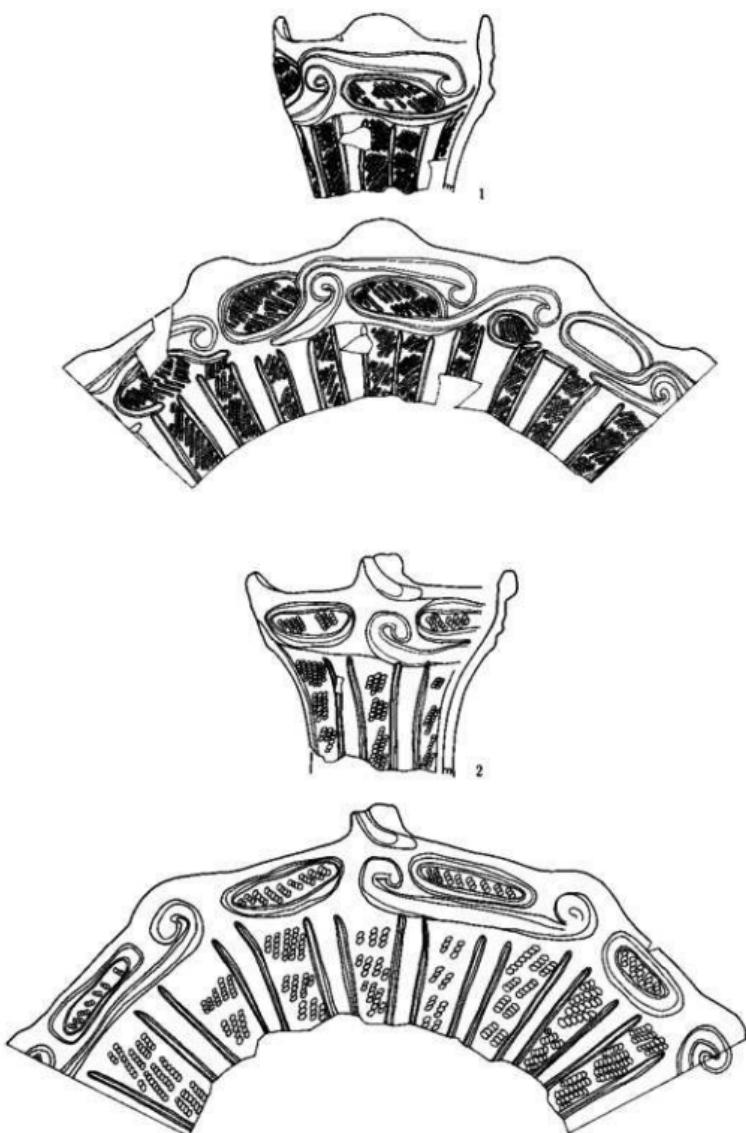
附加条第1種により羽状-菱形に施文する。1・2とも同一個体破片である。

A区遺構出土土器

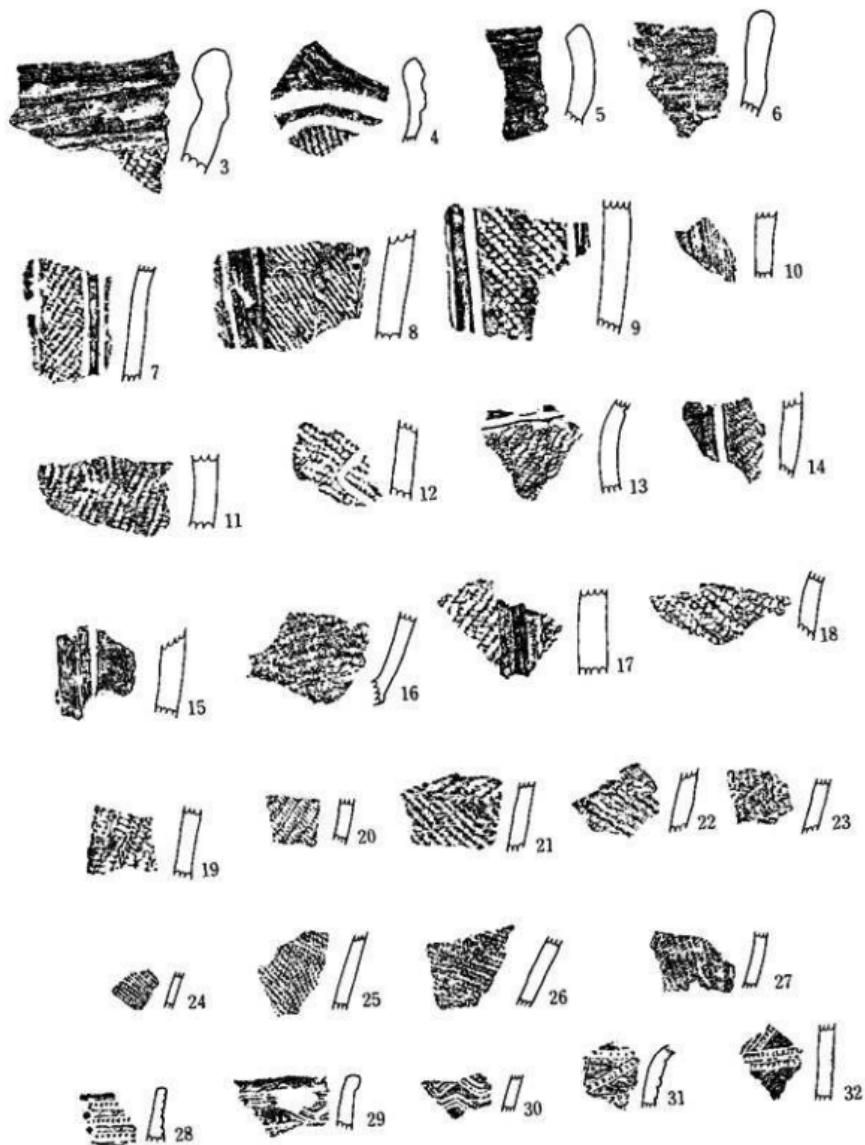
1～10は含繩維土器である。1は連続刺突文の口縁部である。2は爪形文の口辺部片である。3はRL、4は0段多条RLである。5はLRの地文の上に浅い平行沈線が1条垂下している。6はRLか。7は附加条第1種、8は不鮮明であるがLRか。9はRL-LR、10はRLである。1～10は前期中葉の所産と思われる。

11・12は浮線文である。11は2本の浮線の上に矢羽根状のキザミが付される。12は薄い浮線上に繩文施文される。13～20は平行沈線が施文される。13は波状口縁で櫛齒状の工具で施文される。15は口唇部外面に刺突凹文が施文される。18は矢羽根状の集合沈線に棒状、ボタン状貼付文、19は棒状貼付文、20は大波状口縁の先端部に小さなボタン状貼付文が付される。21は有孔浅鉢である。22は棒状工具によると思われる単沈線で区画され、区画内に同じ工具で矢羽根状に充填される。円孔が穿たれる。23は細い竹ベラ状の工具で刺突文を密に充填する。11～23は前期後半の所産と思われる。

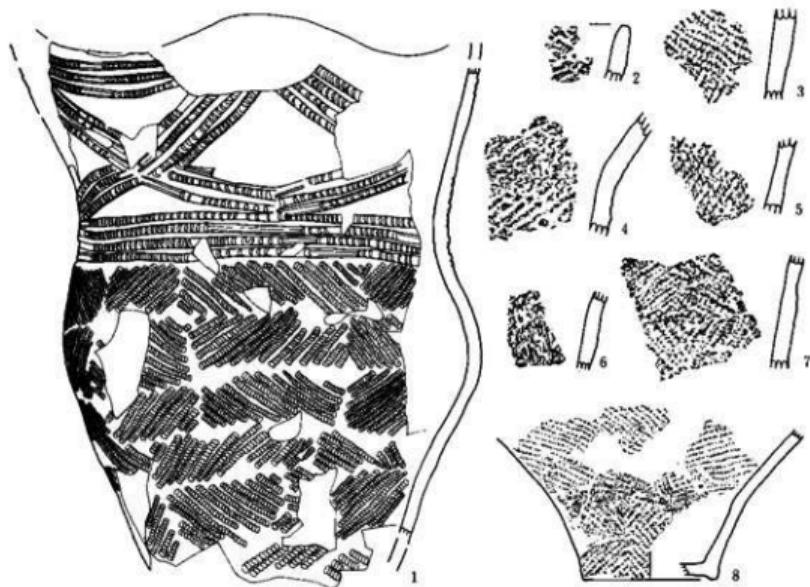
24～27は口縁部片で、24・25は口唇部直下を隆帶で区画し、区画内を沈線で矢羽根状に施文する。26は幅広の無文帯下を隆帶で区画し、内部に繩文LRを充填すると思われる。27は薄い無文の口縁部から急激に肥厚し、LRを施文する。28～32は隆帶と地文の胸部片で、29は高い隆帶上に沈線が1条入る。30は2本の隆帶が垂下し、横帯も巡る。胸部区画内には地文上に沈線文も施



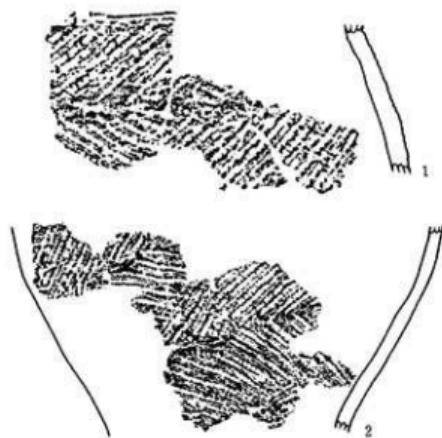
第17図 C J 1号住出土土器(1)



第18图 C J 1号住出土土器(2)



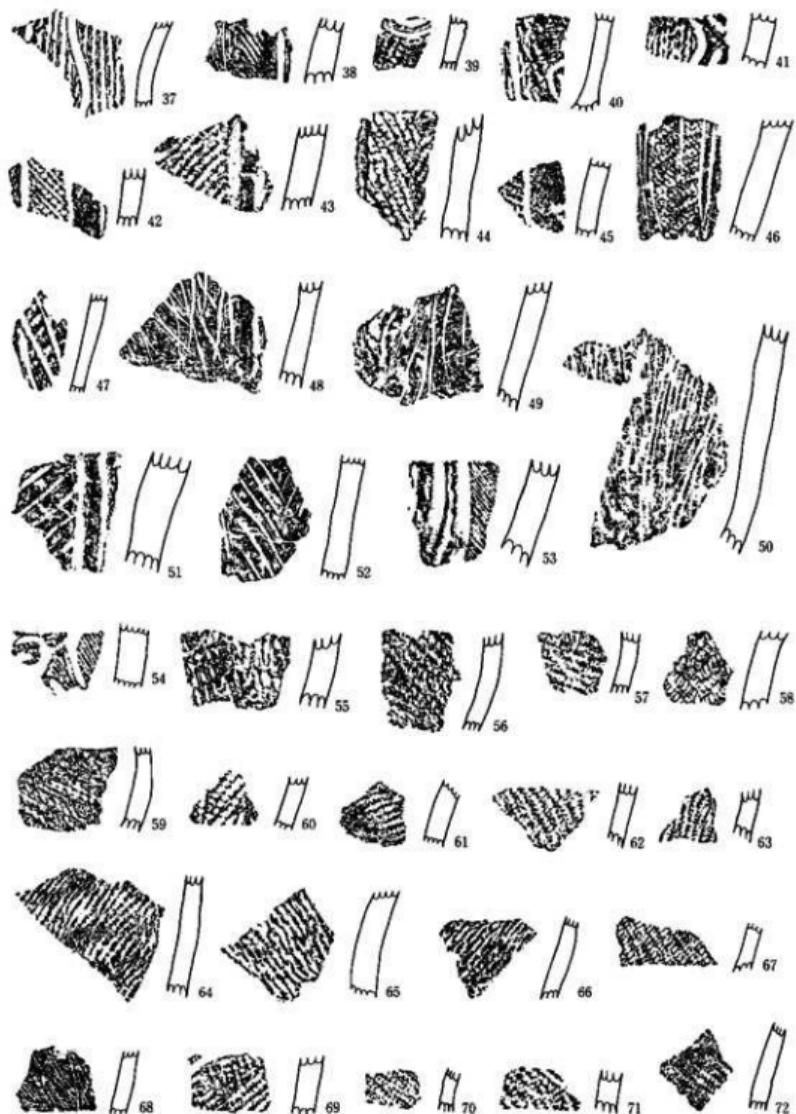
第19図 A J 1号土坑出土土器



第20図 A J 2号土坑出土土器



第21図 A区遺構外出土土器(1)



第22図 A区遺構外出土土器(2)

文される。31・32には弧状の隆帯がみられる。33～47は沈線と縄文が施文されるもので、33～36、39～41は地文上に2～3条の沈線で区画文が施文される。37は蛇行懸垂文、38は区画内に細い平行沈線で施文されるか。42・43・45は沈線間を磨消する。44も磨消帯が沿うと思われる。46は地文上に沈線が垂下する。48～52は無文地に沈線で施文する。48・49は同一個体で隆帯が垂下する。50も同一個体と思われ、全面に沈線が垂下する。51・52は隆帯間を縦位の矢羽根状に施文する。53・54は斜行する細沈線が地文である。54は円文ないし渦巻文が沈線で施文される。55～72は地文縄文の胴部片である。24～72は47を除き中期後半の所産と思われる。ただし、縄文地文は後期のものが含まれる可能性がある。

73～76は口縁部片である。73は口唇部直下の隆帯区画内に円形刺突文を連続させる。76は突起先端に刺突、74は口唇下に交互刺突文を連続させ沈線で区画する。75は沈線区画内に刺突文か、77・78も刺突文である。79・80も口縁部で沈線と磨消帯で区画する。81は沈線で口縁部文様体を区画し、縄文を充填する。また、口唇直下内面は鉛状に張り出す。47、73～81は中期末葉から後期初頭の所産と思われる。

82は波状口縁の土器で、口唇部に沈線を1条施文する。口縁部は外折する。縄文地文上に沈線で施文する。83は口縁部に2列の微隆帯を配し、以下に磨消帯・縄文帯で施文する。84は2条1組の細い磨消帯が垂下する。82～84は後期前半の所産と思われる。85・86は無文の口縁部片で、85は平口縁の可能性もある。87は口辺部片で、太い沈線で区画文、区画内施文する。88は無文で2本の隆帯が横走する。89は無文であるが、焼成後の押し引きが見られる。90・91は浅鉢で、90は沈線で渦巻文が描かれる。さらに細い棒状工具によると思われる細かい刺突文（円形？）が渦巻文の脇に付される。また後に沿って上面に同様の工具で暗文状の斜行沈線が連続施文される。91は口縁部が肥厚し、外反する。92は無文の底部である。

C 区遺構外出土遺物

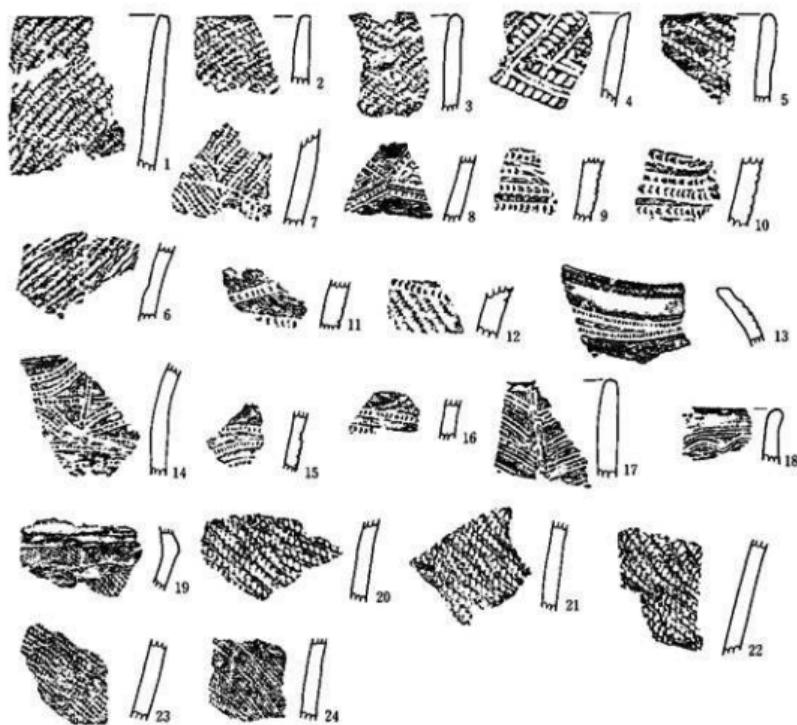
1～12は含繊維土器である。1～7は縄文施文で、1・2・4は口唇部を面取りし、4は内削状。原体は1・2は単節LR、3はLRLで羽状に施文、4は附加条、5も附加条の可能性がある。6は無節のようにも見えるがはっきりしない。7は付加条と単節LRで矢羽根状に施文する。8～12は爪形文である。8は無文部に菱型で区画するが、爪形文というより連続刺突文である。9・10は波状口縁の爪形文帯、11は菱形区画の一部と思われる。12は頸部か。13以降は無繊維で、16までは幅の狭い爪形文で施文される。13は浅鉢である。17・18は平行沈線で、17は肋骨文、18は横帯・波状文が櫛歯状工具で施文される。19～24は地文のみの胴部片で、原体の大小はあるが、いずれも単節RLである。なお、20・21は同一個体である。1～12は前期中葉、13～24は前期後半の所産である。

25は横位のキャタピラ文、26は口縁部に沈線で区画、27は無文帶下に沈線を垂下する。28～32



第23図 A区遺構外出土土器(3)

は隆帯で区画する。28は隆帯上に、29は隆帯の境に刻みを付す。30～32は溝文と梢円区画文と思われる。30は小波状口縁で、32には懸垂帯が見える。33は横位の沈線。34～38は懸垂帯が垂下する。39は地文のみ。40・41は条線が地文で40には蛇行沈線が垂下する。42は幅広の磨消帶、43は無文に横位の沈線、44は無文の口縁部である。地文は26、29、33、34、37がL R、28、31、32、35、39、42がR Lである。36は単軸絡条体で、38もR L繩をL巻きにした単軸絡条体と思われる。



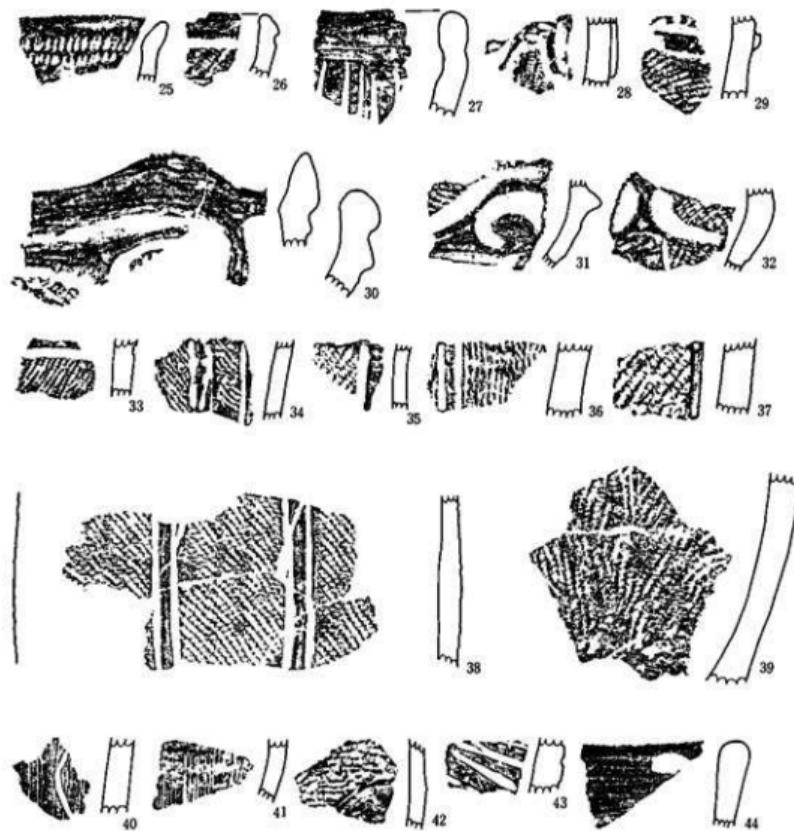
第24図 C区遺構外出土土器(1)

25が中期前半で、他は全て中期後半の所産と思われる。

E区遺構外出土土器（第26図）

調査時点の不備で遺構外としたが、大半はEJ1号住居跡出土遺物と思われる。

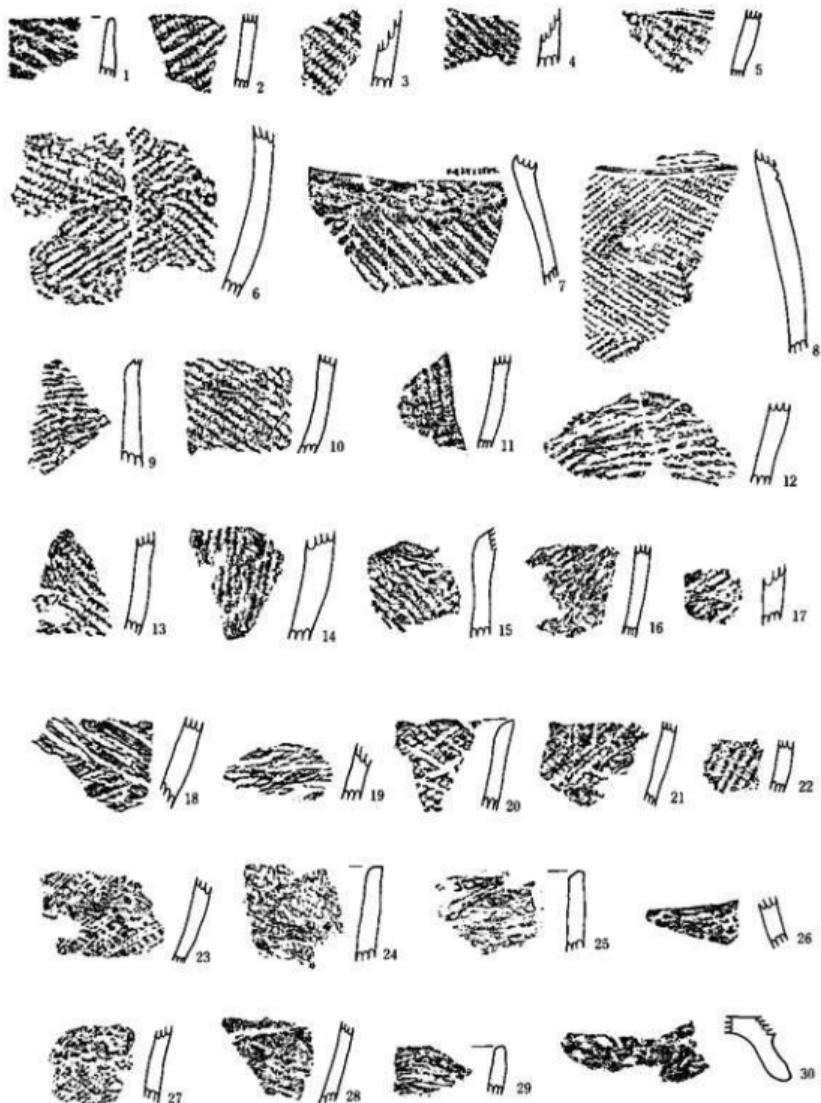
1は口縁部で単軸絡条体か。2は前々段反燃、3・4・5・10・13はRLで、このうち4・5・10は0段多条である。6・7・11はRL-LRで7は0段多条。8は前々段反燃で菱形を構成する。12・15は直前段反燃か、14はR、16・17はLで、17は土製円盤か。18・19は同一個体でEJ1住66とも同一個体。20は附加条第2種か。21・22はLRか。23は附加条第2種、24は前々段反燃、25は単軸絡条体か。30は脚台状の底部で、外面無文である。すべて繊維を含む。



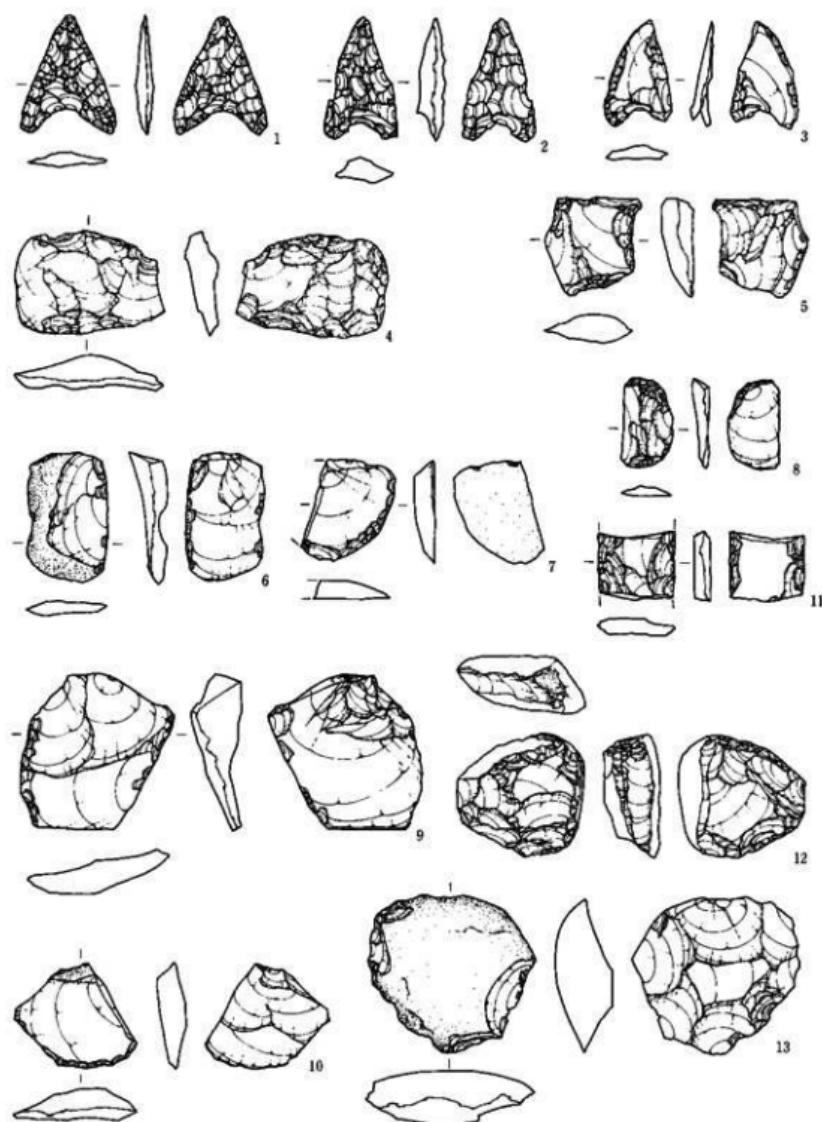
第25図 C区遺構外出土土器(2)

長泉寺遺跡出土石器（第27～29図）

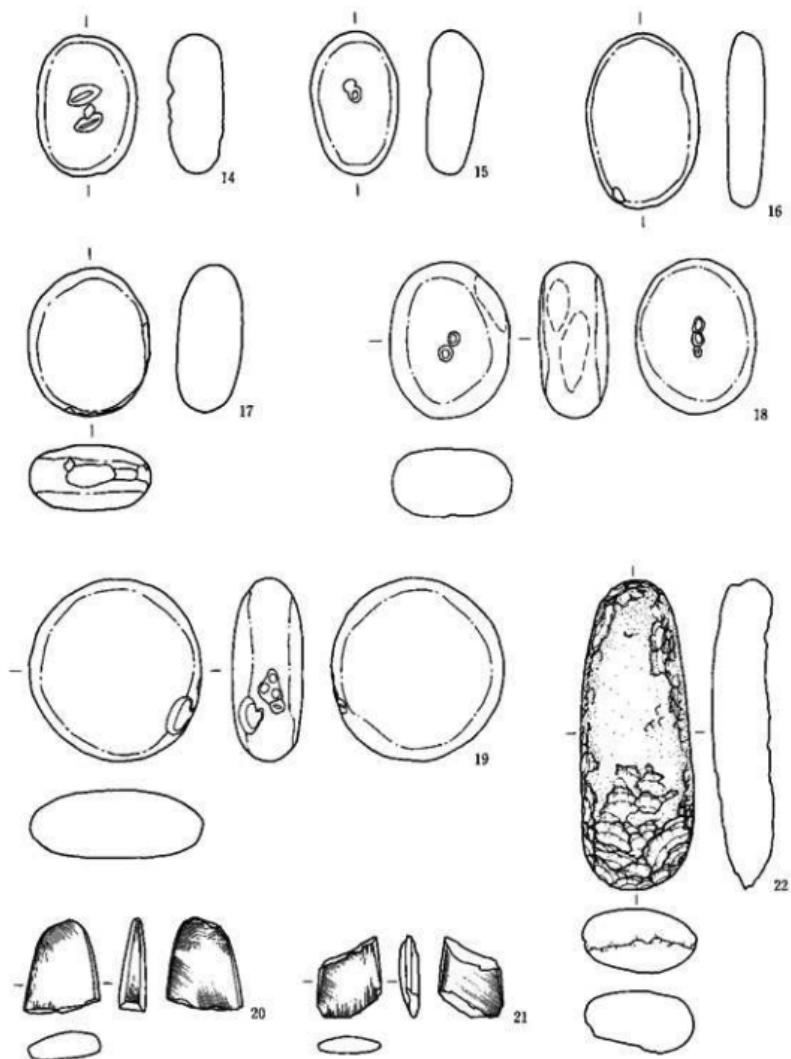
長泉寺遺跡から出土した石器は遺構内外ともに余り多くない。出土した石器の器種は石鏃、打製石斧、磨製石斧、小型磨製石斧、磨石・凹石、多孔石、石皿、剝片石器類、石核がある。出土位置は遺構の占地状況を反映してか、B区を除く各区から出土している。各区の出土状況からは特別な傾向は何もないが、石皿はC区から出土しているだけである。EJ 1号住居跡からは剝片石器類と磨石類が比較的多く出土している。



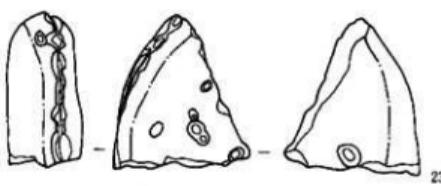
第26図 E区遺構外出土土器



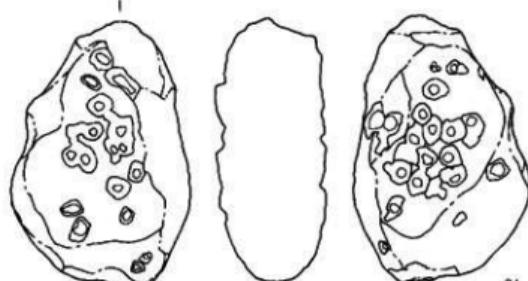
第27図 長泉寺遺跡出土石器(1)



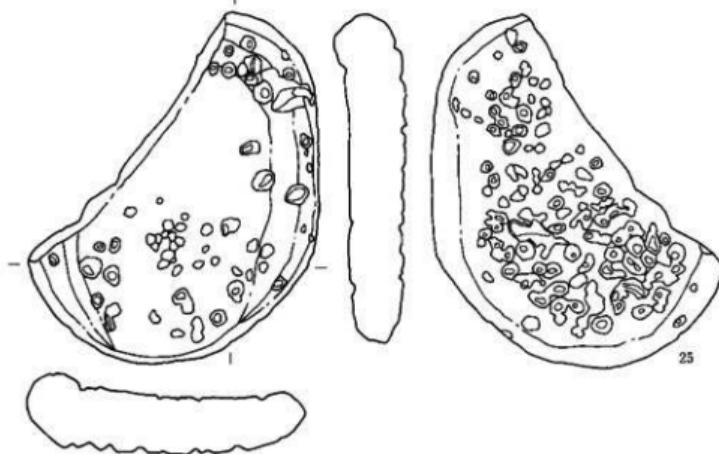
第28図 長泉寺遺跡出土石器(2)



23



24



25

第29図 長泉寺遺跡出土石器(3)

第5表 長泉寺遺跡出土石器計測表（第27～29図）

番号	出土位置	器種	長さ	幅	重さ	石材	備考
1	A区遺構外	石鎌	20.0	16.5	0.6	チャート	包含層
2	A区遺構外	石鎌	21.5	13.0	0.9	頁岩	包含層
3	E区1号 ピット	石鎌	18.5	12.0	0.4	頁岩	
4	A区遺構外	削器	77.5	55.0	67.2	頁岩	1号溝東
5	E区遺構外	削器	52.0	50.0	45.7	頁岩	
6	C区遺構外	削器	68.0	42.0	38.5	頁岩	J1住周囲
7	E J 1住	削器	54.0	48.0	26.5	頁岩	
8	E区遺構外	削器	46.5	27.0	9.4	頁岩	
9	E J 1住	削器	81.5	79.0	97	頁岩	
10	E区遺構外	削器	65.0	57.0	50.4	頁岩	
11	A区遺構外	打製石斧	(35.0)	39.5	19.3	頁岩	1号溝東
12	A区遺構外	石核	64.0	65.0	119	頁岩	1号溝東
13	C区遺構外	石核	89.0	83.0	205	頁岩	J1住周囲
14	E J 1住	磨石・凹石	98.0	72.0	438	安山岩	
15	E区遺構外	磨石・凹石	100.5	62.5	324	安山岩	
16	E J 1住	磨石	122.0	80.5	377	安山岩	
17	E J 1住	磨石	104.0	86.0	612	安山岩	
18	C H 1住5	磨石・凹石	109.5	85.0	684	安山岩	
19	A区遺構外	磨石・凹石	128.0	120.5	1,120	安山岩	1号溝
20	E J 1住	小型磨製石斧	(29.0)	23.0	5.5	蛇紋岩	
21	C区遺構外	小型磨製石斧	(33.0)	27.0	12.6	蛇紋岩	J1住西側一括
22	A区遺構外	磨製石斧	217.0	79.0	1,250	綠泥片岩	打製石斧に転用か
23	C J 1住	石皿	108.5	96.0	438	安山岩	
24	C区遺構外	石皿	280.0	188.0	6,680	安山岩	
25	C J 1炉	石皿	370.5	305.0	5,890	安山岩	

3. 平安時代の遺構と遺物

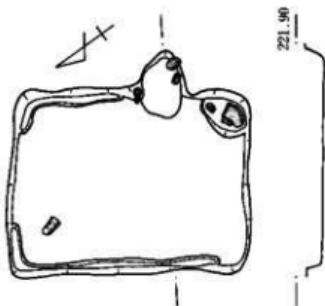
(1) 壁穴住居跡

A 1号住居跡（第30図）

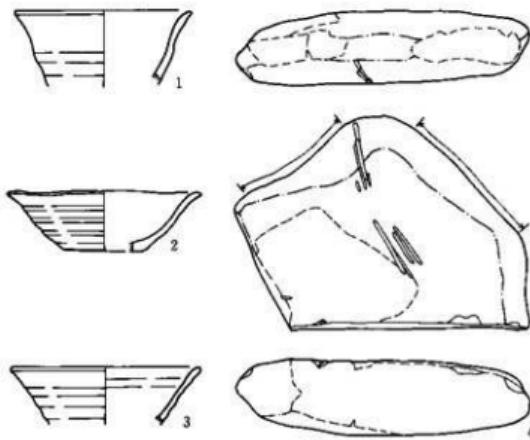
A区西寄りに位置する。西方約6mにA 2号住居跡が近接する。また、南東約3mに掘立柱建物跡も近接する。

東西2m、南北約2.6m、深さ約20cmを測り、隅丸長方形を呈する小型住居である。壁面は若干角度をもって立ち上がる。床面は良好に踏み固められている。南壁と北壁の中央を除いて壁周溝が巡っている。幅10cm前後で、深さ約5cmと浅い。南東隅には長径55cm、短径35cmのピットが検出されており、中から扁平な礫や土器が出土した。竈は東壁の南に寄って付設されている。燃焼部が壁内外にかかるタイプで、煙道部が約40cm壁外に伸びる。補強材である礫が数点残存する。

遺物は坏・塊類がピット中などから出土している。



第30図 A 1号住居跡



第31図 A 1号住居跡出土遺物

A 2号住居跡（第32図）

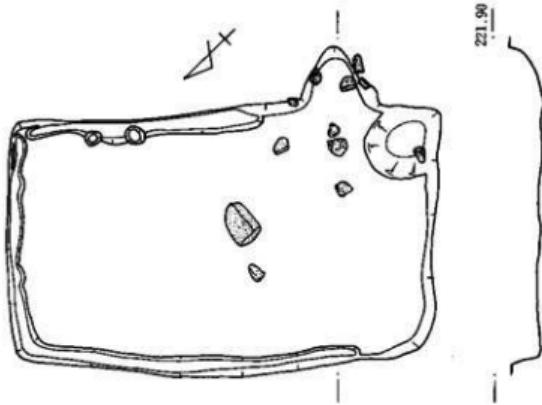
A区西端に位置する。A 1号住居跡が近接する。

東西2.8m、南北4.5mを測る隅丸長方形の住居跡である。深さは25cm前後である。壁面は北半

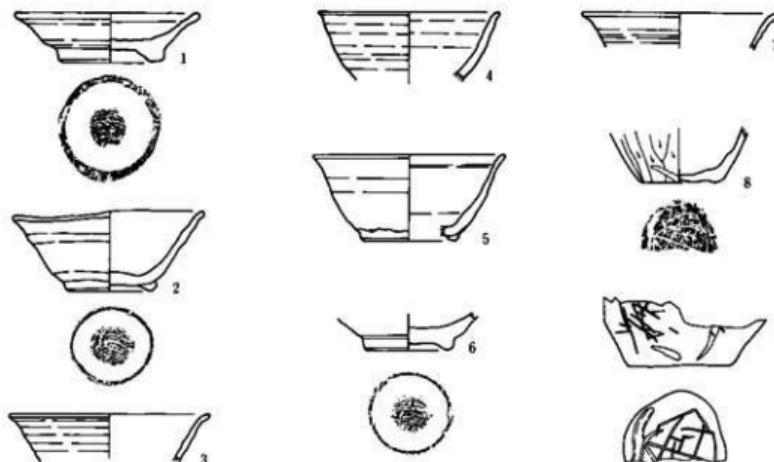
は直に立ち上がるが、南半は若干角度をもって立ち上がる。床面は全体的に堅緻である。南壁を除いて壁周溝が巡っている。幅15cm前後、深さ5cmを測る。南東隅には径約60cm、深さ16cmの浅い土坑が付設されており、中から土器が出土している。東壁北寄りの周溝にかかって2本の小ピットが検出されている。径15・20cm、深さ16・13cmを測る。性格は不明である。竈は東壁のかなり南に偏して付設されて

いる。壁面は縁により補強されており、前面の床面上には補強材と思われる多量の礫が散在していた。内部からは多量の羽釜片が出士した。また前面の床面は広範囲に焼土化していた。

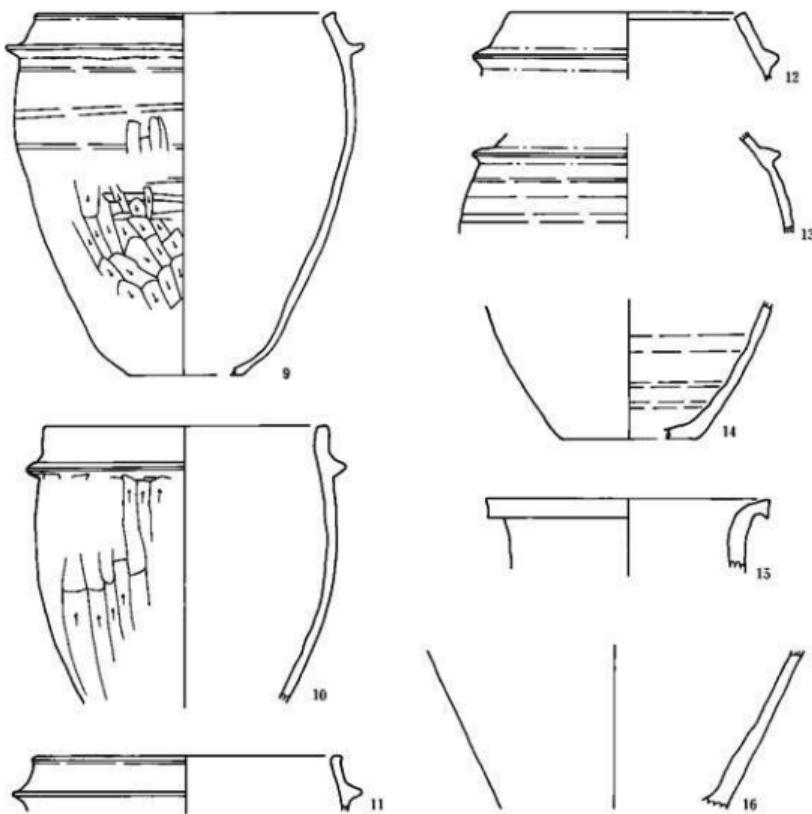
遺物は床面の各所に散在して壺・塊類、羽釜等が出土した。



第32図 A 2号住居跡



第33図 A 2号住居跡出土遺物(1)



第34図 A 2号住居跡出土遺物(2)

C 1号住居跡（第35図）

C区西半部に位置する。2号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。東西4.2m、南北約3.1mを測る、縦長の隅丸長方形住居である。深さは20cm前後である。北壁は直であるが、南壁は若干角度をもって立ち上がる。床面はほぼ全面が堅緻である。南壁を除いて浅い壁周溝が巡っている。幅約10cmで、深さは5cm以下である。西壁周溝は壁から若干離れて掘られている。西隅に壁面から離れ、径約50cm、深さ55cmの土坑が検出された。また、南壁の東端に沿って長辺約65cm、55cm、深さ20cmの土坑が設けられている。この底面中央はさらに25cmほ

ど深く掘られており、この土坑内上層から土器が出土している。竈は東壁のかなり南に偏して付設されている。壁面は疊で補強されており、内部から土器類が出土した。

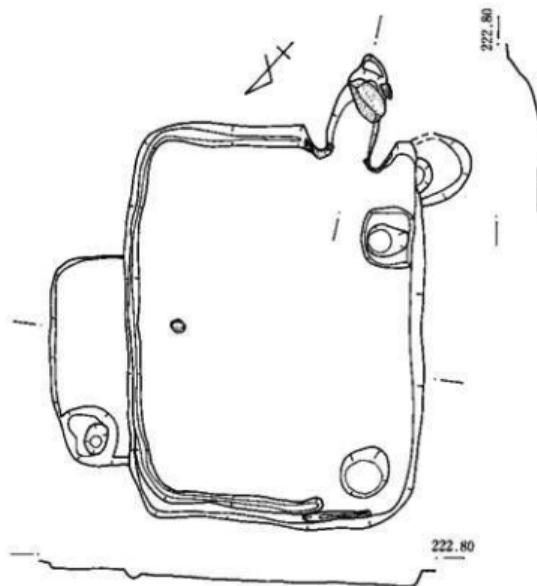
遺物は坏塊類、羽釜脚付小型甕等が出土している。

C 2号住居跡

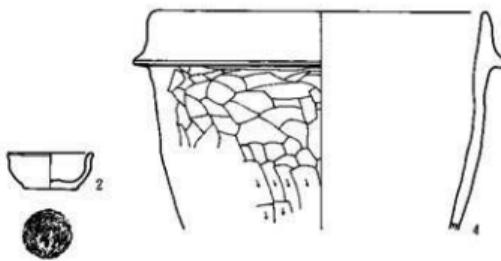
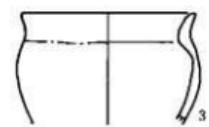
東西2.2mを測り、南北は約80cmを調査した。

深さは5cm弱である。床面は平坦であるが、軟弱である。北西に径60cm、深さ10cmの土坑が検出されている。

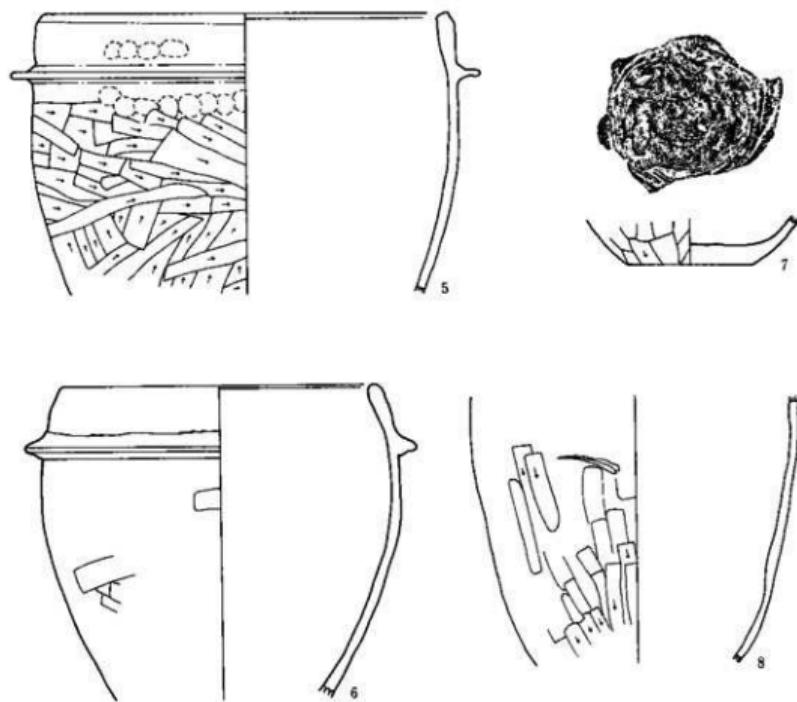
遺物は出土していない。



第35図 C 1・2号住居跡及びC 1号土坑



第36図 C 1号住居跡出土遺物(1)



第37図 C 1号住居跡出土遺物(2)



第38図 C 1号土坑出土遺物

(3) ピット群 (第39図)

A区のほぼ中央に位置する。

ここでは多数のピットが集中して検出されている。このうち5基のピット (P1~P5) は、他に比して規模が極端に大きく、調査区域が狭いため、部分的な調査に留まった可能性もあるが、ここでは検出された部分で一応のまとめがあると考え、掘立柱建物跡として報告したい。また建物跡の時期は明瞭に判断できないが、本項で扱いたい。

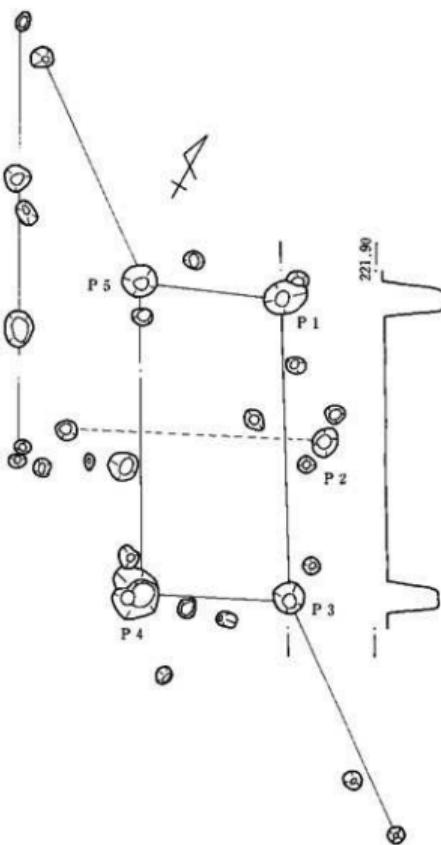
ピットの規模は径40~60cm、深さは70~90cmを測る。これ以外のピットの深さ20~40cmと比べ、格段の違いがある。建物規模はほぼ長方形に配置された4本を基本に考えると、東西1間若しくは2間、南北1間で2.0m×約4.4mを測る。この場合P2が北辺から約30cm外れているが、深さは浅いものの、南辺から約60cm南にP2に対応して位置するP5と合わせて、棟持ち柱と考えることもできる。また、P3とP6を結んだ対角線の延長線上の両側にはいずれも約3.6m離れた位置に小ピットが検出されており、建物跡と関連することも考えられる。

(4) 土坑

B 1号土坑 (第40図)

B区北端に位置する。2号土坑が南西約10mに近接する。

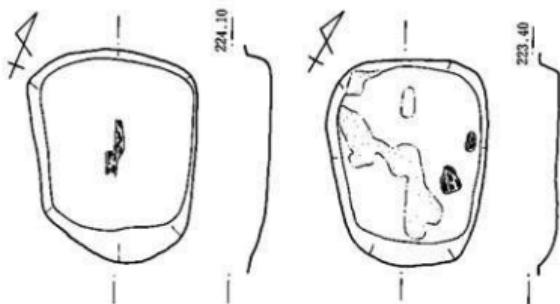
東西約1.8m、南北2.2mを測り、北辺・南辺が弧を描く台形状を呈する。底面は中央部がわずか凹むが、ほぼ平坦である。埋土は上層にC P、F P、焼土混じりの暗褐色土、下層



第39図 ピット群

に炭化物を多量に混入する黒色土が堆積する。また、中央部から北半部の底面に密着して炭化物(藁類か)、灰層が堆積しており、底面は焼土化している。

遺物は羽釜、土釜の破片が底面に密着して出土している。



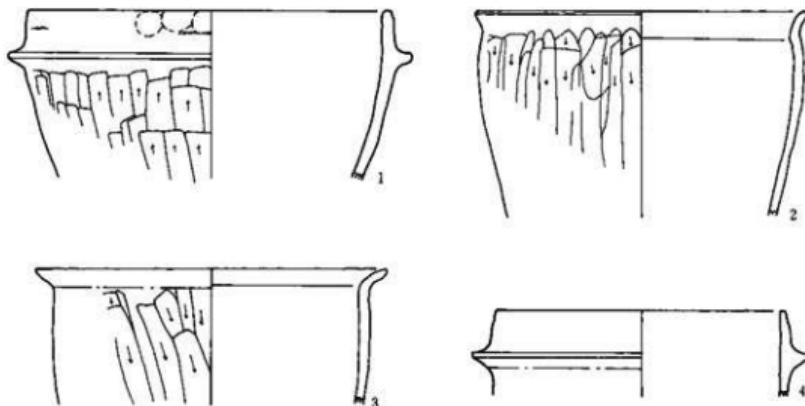
第40図 B1・2号土坑

B 2号土坑（第40図）

B区の南端に位置する。

東西1.7m、南北2.2mを測り、隅丸の長台形状を呈する。深さは北壁が20cm、南壁が8cmである。埋土は南半部に軽石混じりの暗褐色土が、北半部に焼土・炭化物混じりの黒色土が堆積する。底面は中央が凹んでいるがほぼ平坦である。1号土坑と同様に底面密着で炭化物・灰層が堆積する。底面は主に長軸に沿って焼土化しており、土間床状に堅くなっている。

遺物は羽釜破片が出土している。



第41図 B1・2号土坑出土遺物

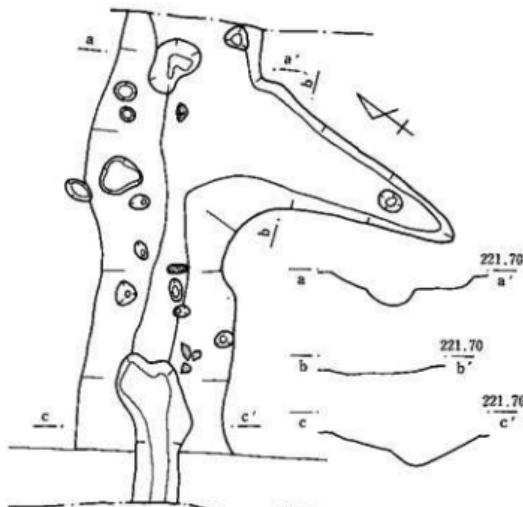
(5) 溝 跡

A 1号溝 (第42図)

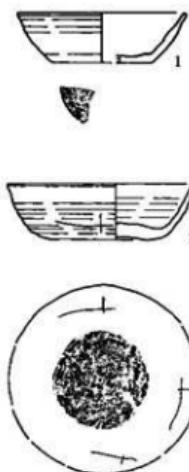
A区の東半部に位置する。

調査区の幅約5.2mの長さを調査し区域外へ伸びている。走向は東西方向で、N-60°-Wを測る。東半部でほぼ真南に分枝し、調査区内で消滅する。溝幅約1.5m、深さ45cmを測るが、基本的に鍋底状の断面形を呈する。底面の各所に流水痕が認められる。

遺物は坏境類、甕などが出土した。



第42図 A 1号溝



第43図 A 1号溝出土遺物

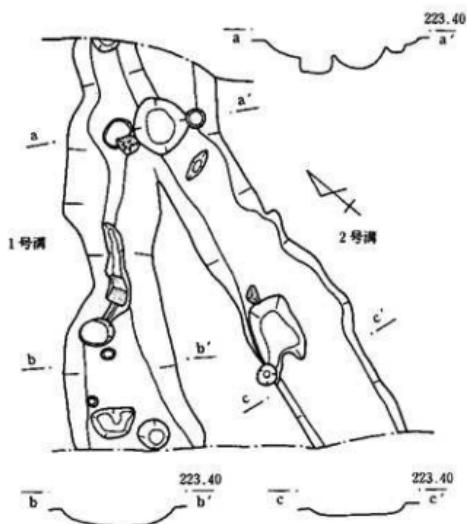
C 1・2号溝（第44図）

C区東端に位置する。調査区内の北端で重複するが、新旧関係は不明である。

調査区の幅約4.5mを調査し、区域外に伸びている。

幅はいずれも1.2m前後を測る。深さは1号溝が約20cmで、断面形状は鍋底状を呈する。2号溝は深さ約10cmと浅く、断面形状は逆台形状を呈する。1号溝にはかなり激しく流水痕が認められている。

どちらの溝からも遺構に伴うと思われる遺物は検出されなかったが、埋土等から平安時代に属すると考えている。



第44図 C 1・2号溝

第6表 A1号住居跡出土遺物觀察表(第31項)

番号	器種	出土位置 残存状態	法 直(cm)	胎土・色調	器 形 、 成 、 積 形 の 特 徴	備 考
1	桶 須恵器	前庭式? 1/8	口:(12.4) 底: 1/6	砂粒 淡黄緑~灰	体部深く、口縁部外反。 内外面回転ナデ。	やや軟質
2	环 須恵器	埋土	口:13.6 底: 高: 4.2	赤色粒、 粗砂 赤緑~暗赤灰	小さな底部から内溝気味に開き口縁部外反。 内外面回転ナデ。底部切り離し後ナデ?。	黒斑、煤 やや軟質
3	桶? 須恵器	埋土 1/8	口:(14.4)	赤色粒、片岩粒 灰	体部へ口縁部は直線的。 内外面回転ナデ。	やや硬質
4	砥石?	長さ: 22.6 幅: 28.8 高さ: 7.8	安山岩。側面も砥面としている。南東土坑と北西隅から出土。			

第7表 A2号住居跡出土遺物觀察表(第33-34項)

番号	器種	出土位置 残存状態	法 直(cm)	胎土・色調	器 形 、 成 、 積 形 の 特 徴	備 考
1	高台付桶 須恵器	南西隅床直 一部欠損	口:13.0 底: 高: 3.6	赤・黒・白色粒 小確 淡黄緑~灰	高台厚く直立気味。体部浅い。 内外面回転ナデ。底部系切り後付高台。 右回転。	二次焼成 やや軟質
2	高台付桶 須恵器	カマド南面 北側 2/3	口:13.5 底: 高: 5.7	赤・白色粒 石英 に赤い黄緑~褐	体部深い。 内外面回転ナデ。底部系切り後付高台。 右回転。	歪み大きい 軟質
3	桶? 須恵器	貯藏六 1/7	口:14.2	白色粒、砂粒 灰~橙	口縁部強く外反。 内外面回転ナデ。底部系切り後付高台。接合部の調整は蓋で外面に粘土はみ出す。	やや軟質
4	桶 須恵器	カマド1/3	口:12.8	赤色粒、小確 淡黄~灰	内外面回転ナデ。口縁部先端に焼成後のキザ ミ?痕があるが、砥石?として使用か。	軟質
5	桶 須恵器	カマド左脇 1/6	口:13.6 底: 高: 6.1	赤色粗粒、 粗砂 淡黄~橙	体上部へ口縁部の器厚は薄い。 内外面回転ナデ。	軟質
6	桶 須恵器	北東隅床直 底部完存	底: 6.2	粗砂 に赤い黄緑~灰	高台直立気味。 内外面回転ナデ。底部系切り後付高台。	やや軟質
7	桶 須恵器	埋土 1/6	口:13.8	砂粒 に赤い黄	口縁部は比較的強めに外反。 内外面回転ナデ。	やや軟質
8	甕 土師器	カマド 3/5	底: 5.6	赤色粒、粗砂 明赤指陶へに赤 い複	内面ナデ。外面へラケズリ。 底部と周辺に擦剥あるが意味不明。	
9	羽蓋	カマド 1/4	口:20.8 肩: 25.6 底: 高: 25.4	白色粒、赤色粒 小確 に赤い黄緑~灰	口縁部は面取り。縫は薄く上半りする。 内面と外面上半部は回転ナデ。外面下半部は ヘラケズリ。底部外面へラケズリ。	
10	羽蓋	カマド 1/4	口:19.8 肩: 22.4	白色粒・赤色粒 粗砂 に赤い黄緑~灰	口縁部は弱い面取り。縫は低い三角形。 胴部内面横方回転ナデ。口縁部内・外面へ持ヨ コナデ。胴部外縁へラケズリ。	縫下面まで ヘラケズリ 痕
11	羽蓋	埋土 1/8	口:21.6 肩: 24.6	白色粒、砂粒 淡黄~灰	口縫は強いナデにより外側に突出。 内外面回転ナデ。	
12	羽蓋	カマド 1/4	口:16.4 肩: 21.4	赤色粒、砂粒 小確、に赤い 複	縫は低い三角形で先端丸い。口縁部面取り。 外側ともヨコナデ。	
13	羽蓋	カマド 1/7	縫: 21.4	赤・白色粒、 粗砂 に赤い 黄緑~に赤い 複	縫は下向き三角形で低い。 内外面丁寧な回転ナデ。	外面に黒斑
14	羽蓋	カマド 1/5	底: 9.6	粗砂 に赤い黄緑~灰	内面回転ナデ。外面胴部へラケズリ後ナデ。 底部へラケズリ。	
15	甕 須恵器	埋土 1/8	口:17.8	白色粒、砂粒 灰	口縁部強く外反。口縁部内面強い回転ナデに より沈む。内面ナデ。外側回転ナデ。	颈部補修痕 やや軟質
16	甕 須恵器	カマド 1/8		赤・白・黑色粒 褐灰	胴下半部は直線的に衝く。 外側とも横方向のナデ。タクシ痕あり。	硬質

第8表 C1号住居跡出土遺物観察表(第36・37図)

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形、成・整形の特徴	備考
1	堆 須恵器	貯蔵穴 1/4	口:13.6 底:7.0 高:5.5	白色粗粒 灰白~灰	口縁部短く外反。体部は内湾し、深い。高台端部の調整は粗雑。 内外面回転ナデ。回転余切り。付高台。	内外面黒斑 やや軟質
2	坏 須恵器	体部一部 底部完存	口:5.6 底:3.6 高:2.6	白色粒、黒色 物 にぶい黄緑	突出気味の底部から内湾してたらあがり、口縁部外反する。 内外面回転ナデ。左回転。糸切り無調整。	焼付着 内面に黒斑 軟質
3	小型壺 (須恵器)	1/4	口:12.4 肩:17.0	粗砂、白色粒 片岩粒 にぶい黄緑	丸い胴部から口縁部は直立気味に外反。 内面口縁部上半ヘラケズリ、他は回転ナデ。 外面部口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	胴部外面は 剝落が激しい
4	羽蓋	カマド前面 1/5	口:23.0 肩:26.4	小穂、砂粒 白色粒 明赤褐色	口唇部は丸みを持つ。内面ヨコナデ、横方向ナデ。外面部口縁部ヨコナデ。ユビオサエ、胴部上半短い斜め。下半縦ヘラケズリ。	口縁部外面に 垂接痕
5	羽蓋	南壁際床直 1/3	口:28.4 肩:33.0	白色粒、砂粒 にぶい黄緑	口唇部厚強く面取り。鋤先半部は薄い。 内面ヨコナデ、横方向ナデ。外面部口縁部~鋤ヨコナデ。胴部上半横・下半縦ヘラケズリ。	口縁部外面に 指擦痕 多い。
6	羽蓋	カマド 1/3	口:22.0 肩:27.6	赤色粒、砂粒 にぶい黄緑	口唇部は丸みを持つ。鋤は先端丸い三角形。 内面ヨコナデ、横方向ナデ。外面部口縁部~鋤ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	表面荒れて おり裏表は 不明瞭。
7	羽蓋?	カマド 底部完存	底:8.6	砂粒、赤色粒 にぶい黄緑~褐	底部内面ハグ状ナデ後ナデ。 外面部ナデ。胴部ヘラケズリ。	内外面に保 付着
8	羽蓋?	埋土 1/7	肩:(23.0)	白色粒、粗砂 にぶい黄緑	器厚薄い。 内面ナデ。外面部ヘラケズリ。	クレーター 状剥落

第9表 C1号土坑出土遺物観察表(第38図)

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形、成・整形の特徴	備考
1	高台付堆 須恵器	底部完存	台:6.8	白色粒、小穂 砂粒 橙~灰黄緑	内面:横→縱ミガキ。 外面部:体部回転ナデ。底部余切り後付高台。 右回転。	不完全な内 黒?
2	羽蓋	1/5	口:26.6 鋤:31.0	白・赤色粒 粗砂 にぶい黄 緑~灰黄緑	口唇部面取り。鋤基部三角状で先半部薄い。 内面ヨコナデ、横方向ナデ。外面部口縁部~鋤ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	外面に輪積 み痕が明顯 に残る

第10表 B1・2号土坑出土遺物観察表(第41図)

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形、成・整形の特徴	備考
1	羽蓋	B1・2号 土坑	口:25.4 鋤:28.4	赤・白色粒 にぶい黄緑	口唇部面取り。鋤先端は丸味ある。 内面ヨコナデ、横方向ナデ。外面部口縁部~鋤ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	B1の破片 だけ2次焼 成受けける
2	土釜	B1号土坑 1/2	口:23.0	赤・白色粒 粗砂 黄緑~棕	口縁部は短く外反。 内面ヨコナデ、横方向ナデ。外面部口縁部~鋤ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	
3	土瓶	B1号土坑 1/8	口:24.6	白色粒、小穂 にぶい黄緑	内面ヨコナデ、横方向ナデ。外面部口縁部~鋤ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	2と同一 個体の可能性
4	羽蓋	B2号土坑 1/8	口:20.4 鋤:23.6	砂粒 にぶい棕	内面ヨコナデ、横方向ナデ。外面部口縁部~鋤ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	

第11表 A 1号溝出土遺物観察表（第43図）

番号	器種	出土位置 残存状態	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	环 須恵器	1/8	口:12.0 底: 7.0 高: 3.5	黒・白色粒 灰	体部は直線的に開き、口縁部は弱い外反。 内外面回転ナデ。底部糸切り後周縁調整。 右回転。	やや硬質
2	环 須恵器	一部欠損	口:13.5 底: 7.0 高: 4.0	赤・白色粒 粗砂 灰白～灰	内外面回転ナデ。底部切り離し後粘土を加え再度切り離している。糸切り後未調整であるが、棒状工具痕あり。	外面に「十」 状の線刻や や軟質
3	束 須恵器	1/5	肩:32.6	白色粒、細砂粒 灰～灰白	内面タキキ後横方向ナデ。外面ナデ。(1ヶ所タキメ残る)	やや硬質

IV まとめにかえて

今回の発掘調査は、圃場整備事業の道路予定地の試掘によって遺構が検出された部分だけを調査するという、ごく小規模なものであった。試掘調査は遺跡の内容に即して行ったわけではないので、遺跡の範囲や密度、あるいは性格についても明瞭に把握されたわけではない。しかし、それらの事項について、断片的ではあるが、ある程度は推測することができる資料も得られているので、若干の補足説明を交えながら調査の成果を振り返りまとめてかえたい。

赤城遺跡

検出された遺構は溝2条と溜井と推測した遺構（1号遺構）1基である。調査地は現況では畠地となっていた。2条の溝については、出土した遺物等から屋敷跡と考えたが、周辺の聞き取り調査を行ったかぎりでは、何らの伝承も残っていないかった。（但し、調査地の南西約100mの畠地には鳥屋敷と呼ばれる屋敷跡の伝承がある。）調査地の北側は住宅となっているが、一代前に宅地になったということであり、ここが屋敷跡であった可能性は否定できないものの、現段階では、調査地の西北部分の畠地に建物跡があり、調査地を含めて屋敷跡であると考えている。

遺構は前記したように近世～近代のものだけであるが、遺物は前期中葉を主体とする縄文時代のものと平安時代の須恵器・土師器が出土しており、集落が存在する可能性が大きい。遺跡の範囲については調査範囲が狭いため明瞭ではないが、現況水田である谷地を東限として北側～西側にかなりの広がりを持つものと思われる。

長泉寺遺跡

縄文時代前期中葉についてはA・C・E区で遺構・遺物が検出されており、調査範囲を網羅する形で集落が展開しているものと思われる。縄文時代中期については遺構はC区で住居跡が1軒検出されただけであるが、遺物はA・B区からも出土しており、密度的にはそれ程濃くないものの、少なくともA～Cを結ぶ範囲に集落が展開するものと思われる。平安時代についてもA～C区で遺構・遺物が検出されていることから、少なくとも同様の範囲に集落が展開しているものと思われる。このように、時代・時期によって多少の違いはあるものの、かなり広い範囲に遺跡が占地しているものと思われる。

縄文時代前期中葉については先述したように赤城遺跡でも遺物が出土している。また、本遺跡から300m南に位置する由森遺跡（昭和62年度調査）でもこの時期の住居跡、土坑を調査している。これらが同時に存在していたものか、あるいは、一家族なりグループが移動しながら居住を続けた結果なのかは、現時点では不明である。この問題を究明するためには、縄文時代中葉の中での同時性が解明される必要があると思われる。また、本跡あるいは周辺の資料数の増加を待たなけ

ればならぬ、今回のような小規模の調査からこれらについて論及することは困難である。今後本跡及び周辺での調査の増加を待って改めて考えてみたい。

平安時代については前記したように、本跡の南に位置する白川遺跡・由森遺跡・久保田遺跡で昭和62年に調査を行っている。これら3遺跡(調査した範囲で判明したこと)の平安時代集落は、互いに重なり合う時期を有しながらもそれぞれが個別の期間消長し営まれている。白川遺跡は前代の8C後半に盛期を迎え、9C前半には衰微する集落である。由森遺跡は9C前半(8C後半)に出現し9C後半に盛期を迎え、10C前半で消滅する集落である。久保田遺跡は9C後半から10C後半まで継続する集落である。

長泉寺遺跡の該期集落の消長を判断するには資料的な限界が大きすぎるが、調査した範囲でみると、住居跡は検出されなかったが、A1号溝からは9C前半代の須恵器壙が出土しており、少なくともこの年代には居住が開始されたことが推測できる。また、B1・2号土坑は11C代に属すると考えられ、間に集落の中止期間が挟まる可能性は否定できないものの、9~11C代に営まれた集落と推定される。遺物を出土した住居跡3軒は、いずれも10C代に属すると思われ、確率的に見れば10C代に盛期を迎えた可能性が強い。

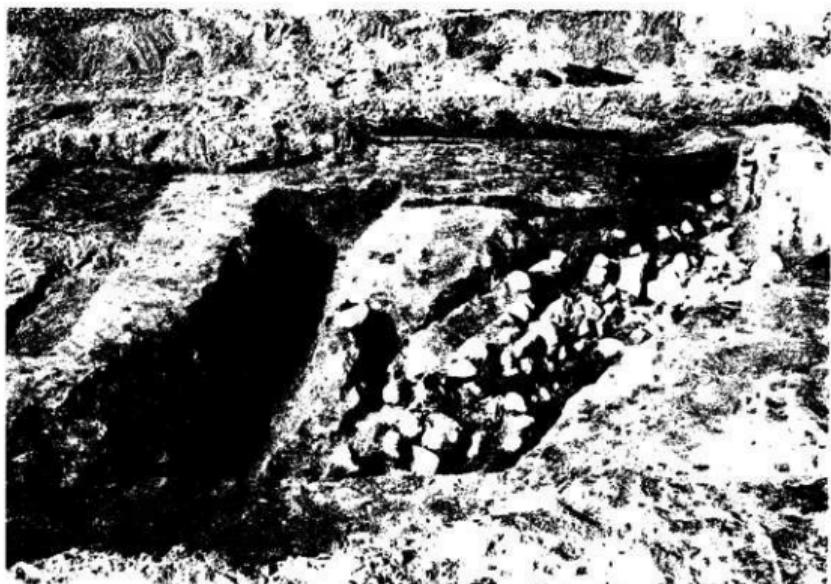
仮に前段の推測が妥当であるとして、長泉寺遺跡と3遺跡の該期集落の消長を比較すると、存続した時期は3遺跡の中では本跡から最も離れた久保田遺跡と比較的類似する。各集落の盛期は久保田遺跡は不明瞭であるが、白川遺跡(8C後半)→由森遺跡(9C後半)→長泉寺遺跡(10C代)というように、一定していない。あるいはこの3遺跡の中で移動が行われたとも考えられる。9C前半代にはこの3遺跡の中の未調査部分、あるいは近接した他の遺跡が盛期を迎えた可能性もある。当時の集落の発生、存続、あるいは消滅にどのような社会・経済的な要因が作用していたかは不明である。また、行政的な単位についても不明であるが、少なくとも白川・由森・長泉寺遺跡については、それぞれの集落の消長が、深く他の集落のそれと係わりをもっていたであろうことが推測されるのである。もちろん多少の差はある、居住時期を同じくする久保田遺跡の集落が係わりを持たないということではないが。

いずれにしても、長泉寺遺跡の調査は試掘調査である。わずかに得られた資料から遺跡全体の様相を把握することは不可能であり、まして他の遺跡との関係を追求することも困難である。これらの問題については今後の資料の増加をまって改めて考えてみたいと思う。

なお、小字名である「長泉寺」についての伝承はなく、調査でも寺の存在を明瞭に証明するような遺構・遺物は検出されなかった。

最後に、改めて、調査に多大なるご助力をいただきました群馬県教育委員会文化財保護課、並びに大胡町教育委員会、北橋村教育委員会に心より感謝申し上げまとめてかえたいと思います。

写真図版



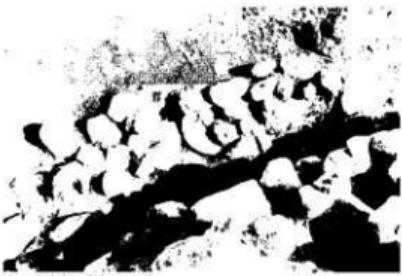
1. 1・2号溝全景（東から）



2. 1号溝全景（北から）



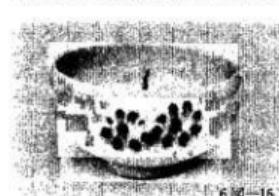
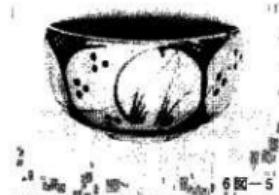
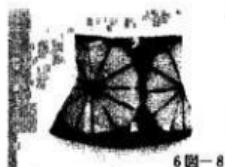
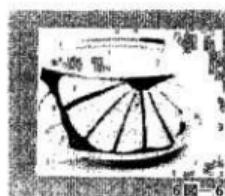
3. 1号溝石積み（北から）



4. 同上（南から）



5. 1号構（北から）



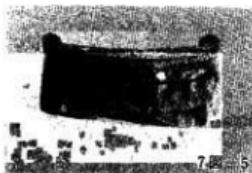
陶磁器・染付



7図-3



7図-7



7図-5



7図-2



1号溝出土（写真掲載のみ）

7図-1



7図-4



7図-6



7図-9



7図-13



8図-1

陶磁器・石臼

P L 4 長泉寺遺跡



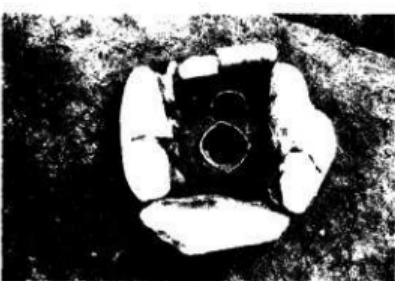
1. A区全景（西から）



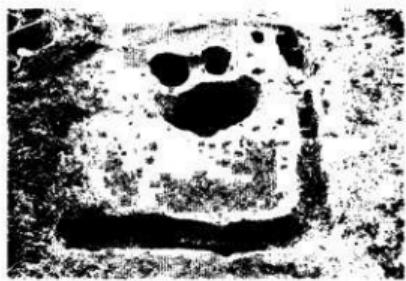
2. C区全景（西から）



1. C J 1号住居跡（北から）



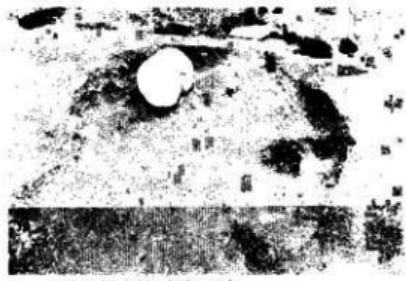
2. 同左 炉（北から）



3. E J 1号住居跡（北から）



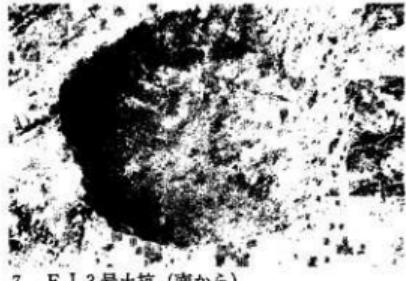
4. A J 1号土抗（北から）



5. C J 1号土抗（西から）



6. E J 5号土抗セクション（北から）



7. E J 3号土抗（南から）



8. E J 4号土抗（東から）



1. A 1号住居跡全景（西から）



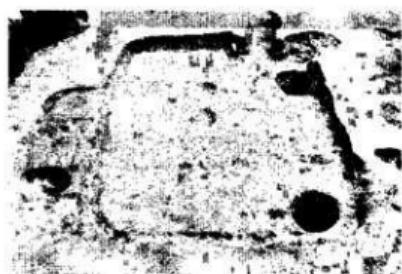
2. 同左南東土抗疊出土状態（西から）



3. A 2号住居跡全景（西から）



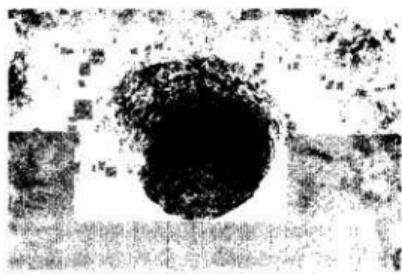
4. 同左（北から）



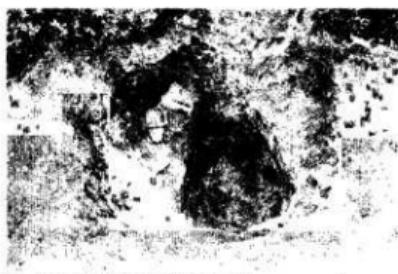
5. C 1・2号住居跡全景（西から）



6. C 1号住居跡竈（西から）



7. C 1号住居跡南西土抗（北から）



8. 同左南壁際土抗（北から）



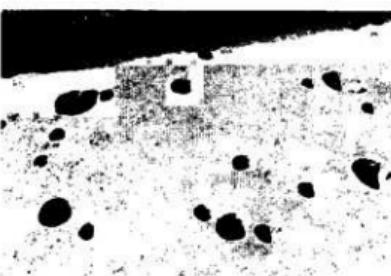
1. B 1号土抗（南から）



2. B 2号土抗（南から）



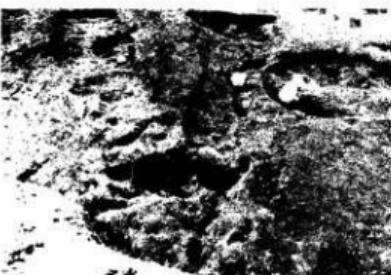
3. C 1号土抗（北から）



4. A区ピット群（北から）



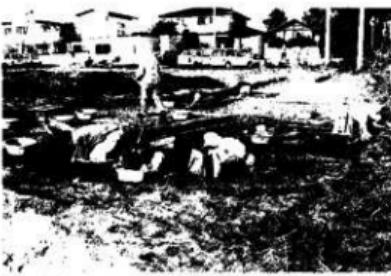
5. A 1号溝（北から）



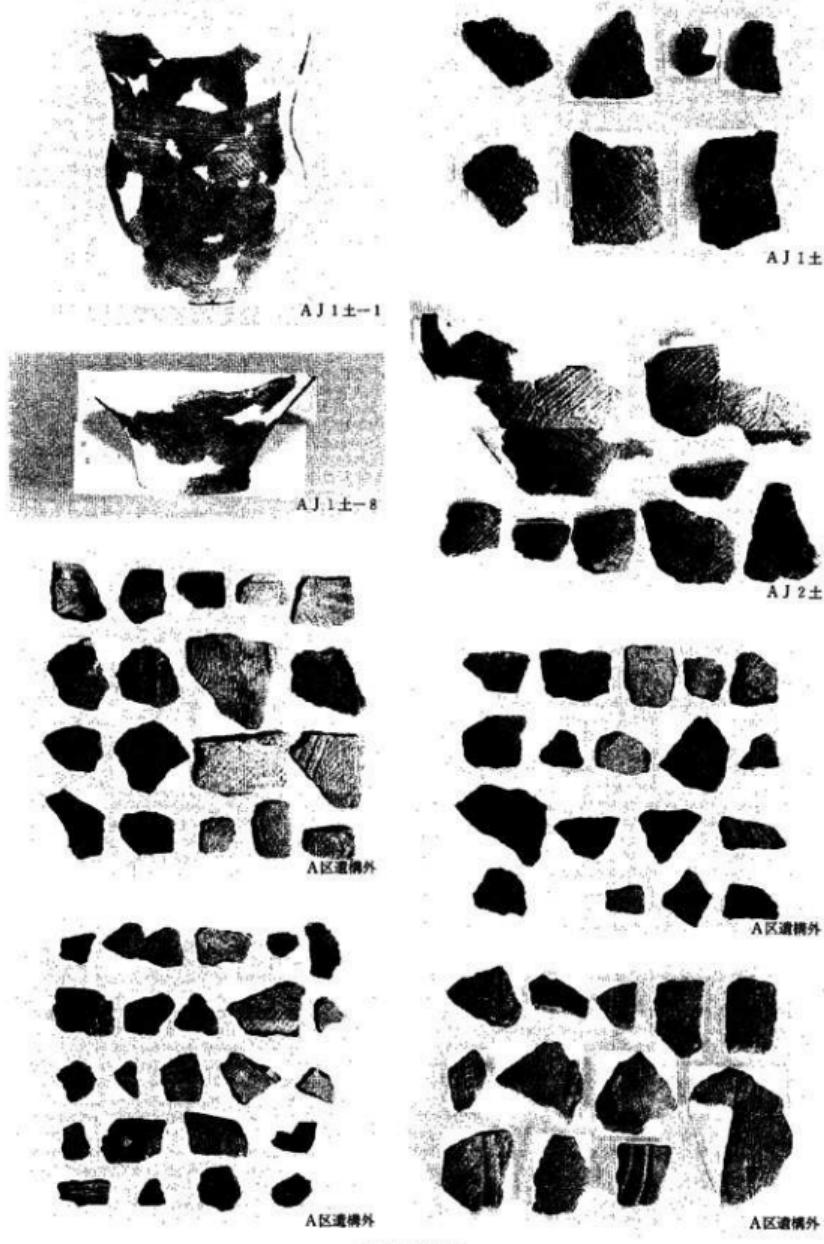
6. C 1・2号溝（北から）

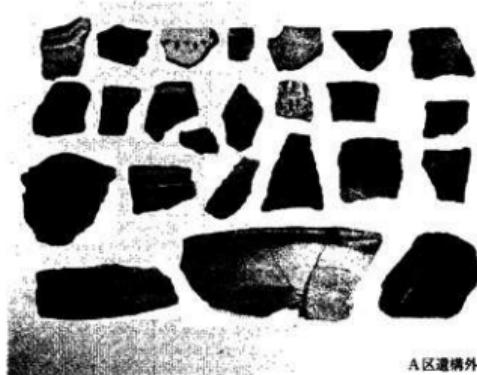


7. E区全景（北から）



8. 作業風景

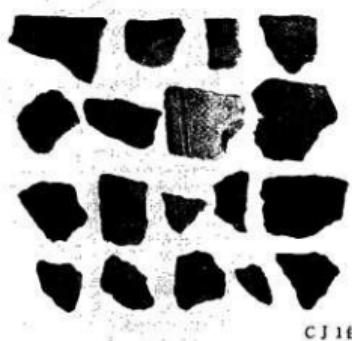




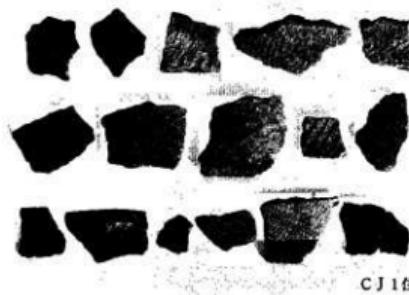
CJ 1住-1



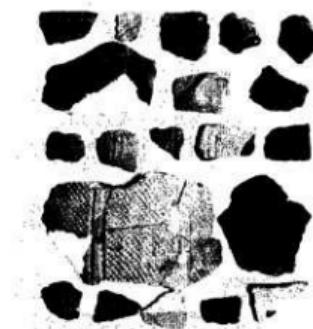
CJ 1住-2



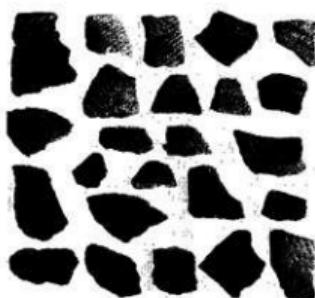
CJ 1住



CJ 1住

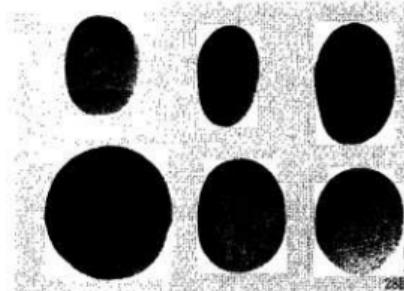
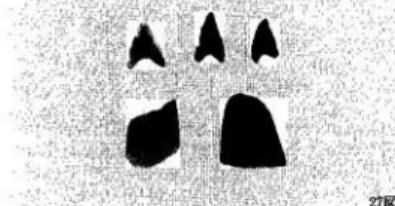
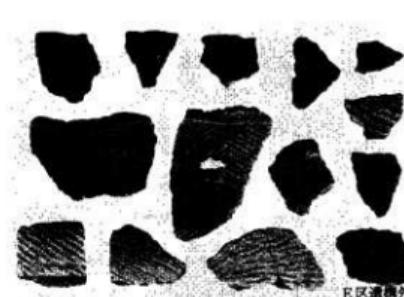
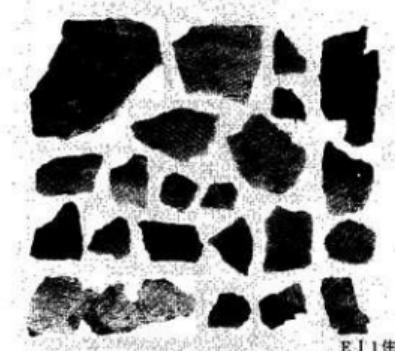
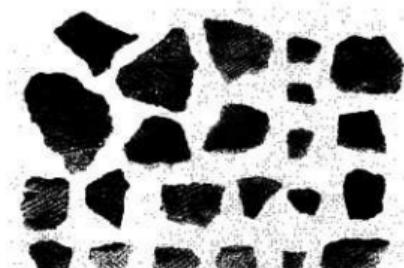
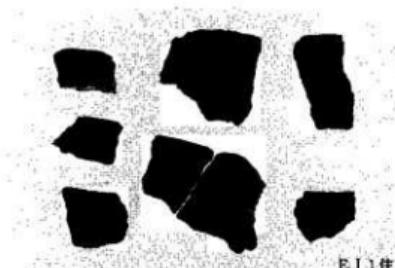
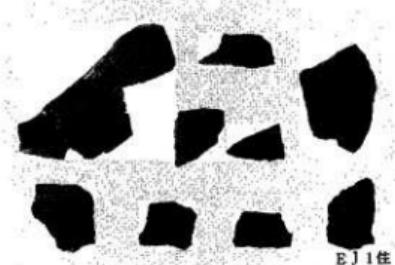


C区遺構外



C区遺構外

縄文時代遺物





29図-23

28図-22



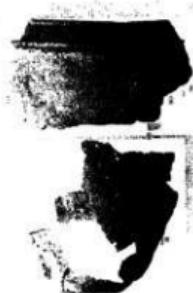
A 2 住-8



A 2 住-1



A 2 住-2



A 2 住-9

P L12 長泉寺遺跡



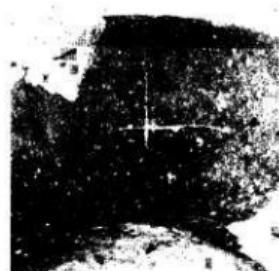
A 2 住-10



A 1 a 土-2



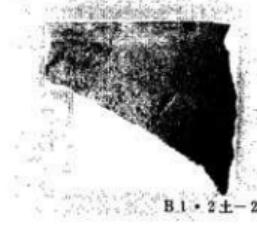
A 1 a 土-3



B 1・2 土-2



B 1・2 土-1



B 1・2 土-2



B 1・2 土-3



C 1 住-5



C 1 住-6



C 1 住-3



C 1 住-4



C 1 住-2



C 1 住-1

平安時代出土遺物

『赤城・長泉寺遺跡』正誤及び補足

《赤城遺跡》

第3図 赤城遺跡全体図 1号構→1号遺構

《長泉寺遺跡》

図版見出し 土坑→土坑

P 3 8 第33図8の下の線刻実測図の縮尺1/3

P 4 3 第40図 B 1・2号土坑 は左がB 1号土坑、右がB 2号土坑

P 4 6 遺物観察表は差し替え

《写真図版》

P L 1 5. 1号構→1号遺構

P L 5 ~ 7 土坑→土坑

P L 12 A 1 a土 - 2 → A 1 溝 - 2

A 1 a土 - 3 → A 1 溝 - 3

富士見地区遺跡群 平成3年度祭宮御場整備事業富士見地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
赤城遺跡・長泉寺遺跡

平成5年3月24日印刷
平成5年3月25日発行

編集・発行/群馬県富士見村教育委員会
群馬県勢多郡富士見村大字田島866-1
電話(0272)88 6111
印刷/朝日印刷工業株式会社
